

平成 11 ～ 12 年度文部省科学研究助成金奨励研究（A）（課題番号 11780158）

談話・テキストレベルの文法知識の習得を 目的とした文法教材の開発

2001年3月

まえがき

本書は、平成 11 ～ 12 年度文部省科学研究助成金奨励研究（A）「談話・テキストレベルの文法知識の習得を目的とした文法教材の開発」（課題番号 11780158）の研究成果報告書です。

本研究の目的は、日本語学習者が中上級レベルの日本語の文法的知識を独習できるような文法教材（参考書）を作ることになりました。

本報告書は「教材編」と「論文編」に分かれています。

「教材編」では、ボイス、テンス、アスペクト、モダリティ、「は」と「が」、指示詞といった分野に関わる文法現象を談話・テキストレベルの問題を中心に取り上げました。

各セクションのはじめには導入のための問題があります。これはそのあとで取り上げられる項目に関する知識を予めチェックするためのものです。本文の最初にはその項目のポイントとなる例文が挙げられています。これらを暗記することも有効な学習方法です。本文の説明はできるだけ簡潔にしました。各セクションの最後にはまとめの問題を設けました。本文で学習した内容をここで確認していただきたいと思います。

「論文編」には、本研究に関してこの間執筆した拙論を収録しています。拙いものですが、今後の教育文法の発展に少しでも資することがあればと思っています。

本報告書の内容は、一橋大学において、筆者が担当している留学生向けの日本語授業「日本語選択・文法Ⅰ」「同・文法Ⅱ」において試用し、改訂を加えたものです。授業に参加し、貴重なコメントをくださった留学生の方々に心から感謝いたします。

2001年3月

庵 功雄

* 本報告書を一橋大学機関リポジトリに掲載するにあたり、PDF 版の他に一太郎版も公開します。一太郎版については自由に改変してご使用いただいて結構です。ただし、改変する前の著作権が庵 功雄にあることを明記してください。

教材編

§ 1 受身、～てくれる、～てもらう、～てくる

<はじめに>

1. 自然な方に○をつけてください。

- (1) a. だれかが田中さんを追いかけた。
b. 田中さんはだれかに追いかけられた。
- (2) a. (私の) 兄が私を叱った。
b. 私は兄に叱られた。
- (3) a. 私の足は電車の中でだれかに踏まれた。
b. 私は電車の中でだれかに足を踏まれた。
- (4) { a. 先生が叱って b. 先生に叱られて } その子は泣き出した。

2. 文の意味はどう違いますか。

- (5) a. 自宅の近所に新しいマンションが建てられた。
b. 自宅の近所に新しいマンションを建てられた。

-
- (6) a. 友だちから来た手紙を彼に読まれた。
b. 友だちから来た手紙を彼に読んでもらった。
-

3. 次の文に間違いがあれば下線を引いて訂正してください。間違いがなければ、() に○を書いてください。

例：田中さんがコップを割れた。()

割った

- (7) 母が私にみかんを送った。
- (8) 寝ようと思ったとき、友だちが電話をかけた。
- (9) 一人では荷物の整理ができなかったので、田中さんに手伝わせた。

受身

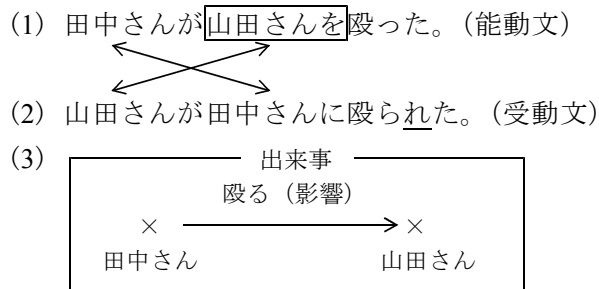
- ・私は知らない男に追いかけられた。
- ・弟は電車の中で足を踏まれた。
- ・渋谷でスリに財布をすられた。
- ・1945年に広島に原子爆弾が落とされた。
- ・日本語の発音は簡単だと言われている。
- ・コンパのときにお酒をたくさん飲まされた。

<受身の種類>

◆動作の影響を受ける人やものの立場から文を作ることを**受身**と言う。

受身には3つの種類がある。

◆**直接受身**は、動作の影響を与える人やものを主語とする文（能動文 active sentence）と、それと同じ意味を表す、動作の影響を受ける人やものを主語とする文（受動文 passive sentence）が対応している場合である。例えば、(2)は(1)で影響を受けた人（山田さん）を主語としている。



◆**間接受身**は対応する能動文がない場合である。例えば、(4) (5)で対応する能動文を作ると（ ）の中のようになるが、これらは正しい文ではない。

(4) 私は雨に降られて、出かけられなかった。

（×雨が私を降った。）

(5) 田中さんは隣の家の人にピアノを弾かれて寝られなかったそうだ。

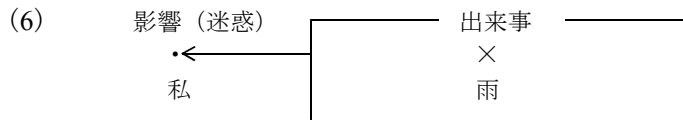
（×隣の家の人が田中さんをピアノを弾いた。）

(4) (5)の意味に近い文は次のようになる。

(4)' 雨が降った。

(5)' 隣の家の人がピアノを弾いた。

(4) (5)と(4)' (5)'の違いは、(4) (5)には(4)' (5)'で表される出来事（「雨が降った」「隣の人がピアノを弾いた」）を迷惑だと思ふ人として、それぞれの文の主語（「私」「田中さん」）がいるということを表している点にある。これを図で表すと次のようになる。



◆**中間的な受身**は、直接受身の性質と間接受身の性質を両方持ったものである。例えば、(8)には対応する能動文として(7)を考えることができるが、(7)の「田中さんの肩」が受動文の主語にならないという点で直接受身とは異なる。また、(10)で盗まれたのは「田中さん」ではない。これは間接受身に近い性質である。

- (7) だれかが田中さんの肩をたたいた。
- (8) 田中さんはだれかに肩をたたかれた。
- (9) だれかが田中さんの財布を盗んだ。
- (10) 田中さんはだれかに財布を盗まれた。
-

＜受身が使われる場合＞

◆直接受身は次のような場合に使う。

①影響を受けた人が影響を与えた人より「私」に近い場合

直接受身は影響を受けた人（影響の受け手）の立場から（＝影響を受けた人を主語にして）文を作るものである。日本語では、影響を受けた人・ものが影響を与えた人（影響の与え手）より「私」に近い場合は受身が自然に使える。例えば、「田中さん」は「だれか」より「私」に近いと考えられるので(11)ではbの方が自然である。同様に、(12)(13)でもbは自然である。ただし、(12)aはそれほど不自然ではない。

- (11)a. ?だれかが田中さんを追いかけた。
b. ○田中さんはだれかに追いかけられた。
- (12)a. ○田中さんが（私の）兄を殴った。
b. ○兄は田中さんに殴られた。
- (13)a. ?（私の）兄が私を叱った。
b. ○私は兄に叱られた。

「私」に近いものの順序は次の通りである。この順序で左側にいる人が影響の受け手で、右側にいる人が影響の与え手の場合は受動文が自然に使える。

- (14) 私 > 「私の～」で表現される人 > 特定の第三者 > 不特定の人 > もの
(親族、友人など) (山田さんなど) (男の人など)

逆に、左側にいる人が影響の与え手で右側にいる人が影響の受け手である場合は受動文は不自然になるので注意が必要である。

- (15) a. ○ (私の) 弟は田中さんを殴った。
b. ? 田中さんは (私の) 弟に殴られた。
(16) a. ○ 私は弟を叱った。
b. × 弟は私に叱られた。

②影響を与えた人がわからない場合、影響を与えた人を言いたくない場合

受身は、影響の受け手を主語にする文なので、影響の与え手がわからないときや、影響の与え手を言いたくない場合によく使われる。例えば、(17) のような場合に a のように能動文を使うと、 の部分（影響の与え手）が主語なのでそれを決めなければならないが、受動文を使うとこの部分は主語ではないので言わなくてもよくなる。

- (17) a. 2002 年に日本と韓国で(が) サッカーのワールドカップを開く。
b. 2002 年に日本と韓国でサッカーのワールドカップが開かれる。

このタイプの受身は書きことばでよく使われる。例えば、(18) a の「と言う」「と思う、と考える、と見る」など）のような能動文の形を使うと の部分と言わなければならないので、それを避けるために受動文がよく使われる。この場合、受動文は一般的な意見、みんなの意見というニュアンスで使われる。

- (18) a. (が) 「日本の大学生はあまり勉強しない」と言っている。
b. 「日本の大学生はあまり勉強しない」と言われている。

③複文で主語を同じものにしたい場合

複文 (complex sentence) には主語が 2 つある。例えば、(19) の主語は「雨」(従属節 subordinate clause = 前の節) と「試合」(主節 main clause = 後ろの節) である。

- (19) 雨が降ったので、試合は中止になった。

このような複文では主語を同じものにすることが自然である。例えば、(20) a, b のような 2 つの文を 1 つにする場合、主語は同じにする方が自然である。こうした場合、(21) のように主節の主語と同じにするのが普通である。そのためには (20) a をそのまま使うことはできないので、受動文にする。そうすると、(22) のような文ができる。

- (20) a. 先生が洋君を叱った。
b. 洋君は泣いた。
(21) 、洋君は泣いた。
(22) 先生に叱られて、洋君は泣いた。

◆ 中間的な受身は次のような場合に使われる。

④だれかの体の部分や持ち物が影響を受けた場合

例えば、(23) のような場合、影響を受けたのは「私」に関係があるものなので①から受動文を使った方が自然になる。もし、これをそのまま受動文にすると (24) a になるが、日

本語では他動詞を述語とする文では普通、ものは主語にならないので、(24)bのような(人を主語にする)中間的な受身が使われる。(23)は体の部分の場合だが、これは(25)のような持ち物の場合も同じで、この場合も直接受身を使った言い方はやや不自然である。

(23) ? だれかが私の肩をたたいた。

(24) a. ×私の肩がだれかにたたかれた。(直接受身)

b. ○私はだれかに肩をたたかれた。(中間的な受身)

(25) ? 泥棒が田中さんのかばんを盗んだ。

(26) a. ? 田中さんのかばんが泥棒に盗まれた。(直接受身)

b. ○田中さんは泥棒にかばんを盗まれた。(中間的な受身)

◆間接受身は次のような場合に使われる。

⑤迷惑な気持ちを表したい場合

例えば、母親が自分の日記を勝手に読んだという場合、それは嫌な(迷惑な)ことなので、その気持ちを表すために(28)のような間接受身が使われる。

(27) 母が私の日記を(勝手に)読んだ。

(28) 私は母に日記を読まれた。

逆に、ある出来事が自分にとって恩恵である場合、「～てもらう」または「～てくれる」を使う。「～てもらう」と「～てくれる」の違いは「私(に近い人)」が主語になる(「～てもらう」)かならない(「～てくれる」)かである。

(29) 手紙が来たがロシア語で読めなかった。そこで友だちに読んでもらった。

(30) ロシア語の手紙が来て読めずに困っていたら、友だちが読んでくれた。

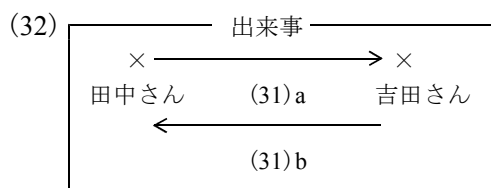
～てくれる、～てくる、～てもらう

- ・母がみかんを送ってくれた。
- ・電車の中で、隣の人がいきなり話しかけてきた。
- ・友だちにレポートを書くのを手伝ってもらった。
- ・急用ができたので、弟に私のかわりにパーティーに行ってもらった。

◆他動詞文では普通、主語と目的語を入れ換えた文を作ることは可能である。

(31) a. 田中さんが吉田さんに本を送った。

b. 吉田さんが田中さんに本を送った。



ところが、一部の動詞では、「私（に近い人）」が目的語の場合にはそのままの動詞の形が使えないことがある。このタイプの動詞には次のようなものがある。

(33) 送る、教える、電話をかける、話しかける、

(34) a. ○私は吉田さんに本を送った。

b. ? 吉田さんが私に本を送った。

(35) a. ○（私の）弟は田中さんに英語を教えた。

b. ? 田中さんが（私の）弟に英語を教えた。

(36) a. ○弟は電車の中で隣の人に話しかけたそうだ。

b. ? 電車の中で隣の人が弟に話しかけたそうだ。

また、自動詞の中でも、目的語への接近を表す次のような動詞は目的語が「私（日回避と）」の場合はそのままの形では使えない。

(37) 近づく、向かう、電話がかかる、

(38) ? 向こうからバイクが（私の方に）近づいた。

(39) ? 寝ようと思ったら電話がかかった。

こうした場合、次のようにすると正しい文になる。

①具体的なものや人の移動がある場合（送る、近づく、飛ぶ…）

動詞に「～てくる」をつける。

(40) 吉田さんが（私に）本を送てきた。

(41) 向こうからバイクが近づいてきた。

(42) ボールが（私の方に）飛んできた。

「電話をかける、電話がかかる、話しかける」のようなことばによるものも含まれる。

(43) 田中さんが毎晩電話をかけてきた。

これらの場合に「～てくれる」をつけると、その出来事が「私（に近い人）」にとって恩恵になることが表される（恩恵にならない出来事の場合は「～てくれる」は使えない）。

(40)' 吉田さんが（私に）本を送ってくれた。

(43)' 留学したばかりでさびしかったとき、田中さんが毎晩電話をかけてくれた。

(41)' ×向こうからバイクが近づいてくれた。

②それ以外（貸す、教える、見せる…）

「～てくれる」をつける（「～てくる」は使えない）。

(44) 田中さんは私にお金を { ? 貸した / ○ 貸してくれた / × 貸してきた }。

(45) 祖父は私にいろいろなことを { ? 教えた / ○ 教えてくれた / × 教えてきた }。

(46) 田中さんは弟に面白い写真を { ? 見せた / ○ 見せてくれた / × 見せてきた }。

◆「～てもらう」は、①間接受身の代わりに使うことも、②使役の代わりに使うことも可能である。①の場合は出来事が話し手にとって恩恵であるということを表す。例えば、(47)で表される内容は普通、話し手にとって迷惑なことなので(48)のような間接受身を使うのが自然である。一方、(49)で表される内容は普通、話し手にとって恩恵になることなので(50)のように「～てもらう」を使うのが自然である。

(47) 兄が私のおもちゃを壊した。

(48) 私は兄におもちゃを壊された。

(49) 兄が私のおもちゃを直した。

(50) 私は兄におもちゃを直してもらった。

一方、「～てもらう」が使役の代わりになるのは次のような場合である。(51)a は強制の用法で秘書の気持ちを考慮しない命令に近いものだが、(51)b は秘書の気持ちを考慮した依頼を表す。実際はこうした場面では使役よりも「～てもらう」を使うのが普通である。

(51)a. 田中さんは秘書に資料をコピーさせた。

b. 田中さんは秘書に資料をコピーしてもらった。

【まとめの問題】

1. 次の文をより適当な文にしてください。そのままの方がいい場合もあります。

(1) だれかが私の家のガラスを割りました。

→ _____

(2) 私は弟をなぐった。

→ _____

(3) 弟が知らない人の足をふんだ。

→ _____

(4) 田中さんが私の手紙を読んだ。

→ _____

(5) 選挙でみんなが山田さんを議長に選んだ。

→ _____

2. () に「が、に、を」のどれかを入れてください。

(6) あの店で宝石 () 盗まれたそう。

(7) 私は夜中に子ども () 起こされて、よく寝られませんでした。

(8) 私は息子 () パソコン () 壊されて、仕事ができない。

(9) A : 田中さんの息子さん () 殺されたそうですよ。

B : えっ、だれ () ですか。

A : わかりません。警察が今調べているようですよ。

B : 田中さんは息子さん () 殺されて、今どんなに悲しんでるでしょうね。

3. ____に () 内の文字で始まる適当な動詞を適当な形で入れて文を完成してください。

(10) 田中さんが昨夜電話を (か _____)。

(11) ビデオが故障したので、電気屋さんに (直 _____)。

(12) ヤン : スピーチの原稿を田中さんに (見 _____) んだ。

王 : それはよかったね。

(13) ゼミの発表の準備で困っていたら林さんが (助 _____)。

(14) 駅前で友だちを待っているときに知らない人が (話 _____)。

§ 2 使役

<はじめに>

1. 表の中の空欄に適切な形の動詞を入れてください。

書く	書かせる	書かされる
食べる		
飲む		
来る		
乗る		
着る		

2. 次の文で（ ）の中の動作をするのはだれですか。< >に書いてください。

- (1) 田中さんは山田さんに荷物を持たせた。(持つ) < >
(2) 私は父に海で泳がされた。(泳ぐ) < >
(3) 私は弟にパソコンを使わせてやった。(使う) < >
(4) 弟は田中さんに資料を読ませてもらった。(読む) < >
(5) 兄は私に料理を作ってくれた。(作る) < >
(6) 兄は私に料理を作らせてくれた。(作る) < >

3. 文の意味はどう違いますか。

- (7) a. カラオケで歌を歌った。
b. カラオケで歌を歌わされた。

-
- (8) a. 田中さんにコピーを取らせた。
b. 田中さんにコピーを取ってもらった。

-
- (9) a. この手紙を読んでもくれませんか。
b. この手紙を読ませてくれませんか。
-

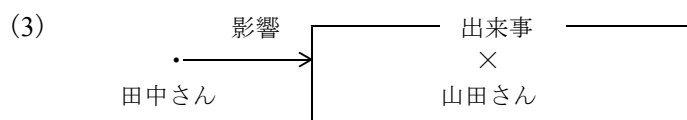
使役

- ・田中さんは娘さんにピアノを弾かせた。
- ・気分が悪そうだったので、先に帰らせた。
- ・この本を読ませてください。
- ・パソコンを使わせていただきます。
- ・大手のスーパーが駅前に新しい店をオープンさせた。

◆主語の人が自分で何かをするのではなく、他の人がそのことをするように働きかけることを表すのが**使役**である。例えば、(1)で買い物に行ったのは「山田さん」であり、「田中さん」は(2)で表される出来事が起こるように働きかけた人である。

(1) 田中さんは山田さんを買い物に行かせた。

(2) 山田さんが買い物に行く。



◆使役文の文型（sentence pattern）は動詞が自動詞か他動詞かで、次のようになる。

<自動詞の場合> Aが B {を／に} V（さ）せる

<他動詞の場合> Aが Bに Cを V（さ）せる

自動詞の場合は「を」も「に」も使えるが、「を」のほうが多い。

(1) 田中さんは子ども {○を／？に} プールで泳がせた。

(2) 山田さんは娘 {○を／？に} 駅まで歩かせた。

ただし、後に「を」が出てくるときは「に」を使う。

(3) 田中さんは娘 {×を／○に} 公園を歩かせた。

<使役が使われる場合>

◆使役は次のような場合に使われる。

①相手の気持ちに関係なく、その人が何かをするようにする場合（強制）

使役の最も典型的な場合である。

(4) 彼は嫌がっている息子を学校に行かせた。

(5) 彼女は友だちに宿題を手伝わせた。

相手の気持ちを考慮した上で依頼する場合には「～てもらおう」を使う。

(5)' 彼女は友だちに宿題を手伝ってもらった。

②相手が「～したい」というのでそれを認める場合（許可）

①で動作の結果を望んでいるのは主語だが、この場合、望んでいるのは相手である。

(6) パソコンを使いたいというので、彼にパソコンを使わせた。

(7) 頭が痛いというので、学校を休ませた。

許可という意味をはっきりさせるには「～（さ）せてやる／あげる」を使う。

(6)' パソコンを使いたいというので、彼に {使わせてやった／使わせてあげた}。

許可を得たことを表すには「～（さ）せてもらう／～（さ）せていただく」を使う。

(8) 友だちにパソコンを使わせてもらった。

(9) 先生にパソコンを使わせていただいた。

相手に許可を求めるときには「～（さ）せてもらえますか／～（さ）せてもらえませんか／～（さ）せてもらってもいいですか」などを使う（「～もらいますか／～もらいませんか」ではないので注意）。

(10) このパソコンを使わせてもらえませんか。（×使わせてもらいませんか）

「～させていただく」は敬語としてもよく使われる。

(11) それではただいまから会議を始めさせていただきます。

(12) 試合の途中ですが、この辺で中継を終わらさせていただきます。

③自分の力不足である出来事が起こることを防げなかったということを表す場合

ある出来事が起こったことに対して話し手が責任を感じている場合も使役が使われる。

(13) 戦争で息子を死なせてしまった。

(14) お待たせしてすみません。

(15) 食べるのを忘れて、サラダを腐らせてしまった。

④自動詞に対応する他動詞がないときにその代わりに使う場合

日本語には「閉める－閉まる」「割れる－割る」「消える－消す」のように、自動詞と他動詞のペアがあるものがあるが、「～する」をつける動詞（サ変動詞）には他動詞の形がない場合が多く、その場合に使役の形が使われる。

(16)a. 駅前に新しい店がオープンした。（自動詞）

b. 大手のスーパーが駅前に新しい店をオープンさせた。（他動詞の代わり）

(17)a. お湯が沸騰した。（自動詞）

b. ラーメンを食べるためにお湯を沸騰させた。（他動詞の代わり）

日本語ではものが主語になることはほとんどないため、(18)a のような使役文は不自然である。こうした場合は(18)b のような自動詞文か(18)c のような使役受身文を使う。

(18)a. ?彼のいたずらがみんなを困らせている。

- b.○彼のいたずらでみんなが困っている。
c.○みんなが彼のいたずらに困らされている。

使役受身

- ・友だちに酒をたくさん飲まされたので、今日は頭が痛い。
- ・今度の問題ではいろいろなことを考えさせられた。

◆受身の中で動詞のものの動詞が使役の形をしているものを**使役受身**と言う。

<形>

Group I（五段動詞）の場合は「～せられる」「～される」という2つの形があるが、普通は「～される」の方が使われる。

書く→書かされる（書かせられる） 飲む→飲まされる（飲ませられる）

Group II（一段動詞）と「来る」の場合は「～させられる」の形が使われる。

食べる→食べさせられる 来る→来させられる

<使役受身が使われる場合>

使役受身は次のような場合に使われる。

①使役文の主語が他の人で動作をするのが私（に近い人）である場合

受身のところでも見たように、日本語では私（または私に近い人）に関係する出来事を表す文の主語を私（または私に近い人）以外にすることを嫌うため、こうした場合には受身（使役受身）が使われる。

- (19) a. ? みんなが私にたくさん酒を飲ませた。
b. ○私は（みんなに）たくさん酒を飲まされた。
(20) a. ? 父は私にバイオリンの練習をさせた。
b. ○私は父にバイオリンの練習をさせられた。

このタイプの使役受身は迷惑な気持ちを表すことが多い。使役受身ではない形（「ー（ら）れ」や「ー（さ）せ」を含まない形）と使役受身は出来事としては同じことを表すが、使役受身には迷惑というニュアンスが加わることが多い。例えば、(19) b と (21) を比べると、(19) b には「酒を飲みたくなかった」というニュアンスが強いが、(21) にはそうしたニュアンスはない。

- (19) b. 私はたくさん酒を飲まされた。
(21) 私はたくさん酒を飲んだ。

出来事が好ましいものであると感じている場合は「～（さ）せてもらう」を使う。

- (20)' 私は父にバイオリンを練習させてもらった。

ただし、いつも迷惑が感じられるわけではない。例えば、(22) には迷惑のニュアンスが

ある場合もあるが、そうしたニュアンスがなくてもこの文は使える。

(22) 私は祖父 {に／から} よく戦争の話を聞かされた。

②原因となることがあり、そのために悩んだり、考えたりした場合

この場合もものが主語になるのを避けるために受身が使われるが、①とは違って迷惑のニュアンスがないのが普通である。

(23) a. ? 今度の事件が（私に）いろいろなことを考えさせた。

b. ○（私は）今度の事件でいろいろなことを考えさせられた。

(24) a. ? 彼の発言が私たちをがっかりさせた。

b. ○私たちは彼の発言にがっかりさせられた。

【まとめの問題】

1. ____の部分に（ ）の中の動詞を「～させてあげる、～させてくれる、～させてもらう、～てあげる、～てくれる、～てもらう、使役受身」のどれかの形にして入れて文を完成してください。

- (1) 学生が使いたいというので、研究室のパソコンを____。(使う)
- (2) 山田：田中さん、新しい本を____よ。いい本ですね。(読む)
田中：ありがとうございます。
- (3) 「疲れた。」と言ったら、田中さんが部屋で____。(休む)
- (4) 田中さんに資料を貸してほしいと頼んだら、____。(貸す)
- (5) 目が不自由な友だちのために本を____。(読む)
- (6) 英語の説明がよくわからなかったので、日本語で____。(説明する)
- (7) 子どものとき、毎日漢字を____。(練習する)
- (8) 頭が痛かったので、弟に代わりにパーティーに____。(出る)
- (9) 英語でスピーチをする自信がなかったので、日本語で____。(話す)
- (10) 私はカラオケで他の人の下手な歌を____のがいやなのです。(聞く)
- (11) この問題については私に____。(説明する)
- (12) 彼女のすばらしい歌声に____。(感動する)
- (13) 彼の部屋に行ったら、宿題を____。(手伝う)
- (14) 先週の土曜日、彼の家に____。(泊まる)

§ 3 時間を表す表現（１）ー～する、～した、～してしまうー

<はじめに>

A. 次の各文の a～c のうち、下線部の性質が他と違うものに○をつけてください。

- (1) a. 午後から風が強くなります。
b. コンサートは9時に終わります。
c. その本は図書館にあります。
- (2) a. さっき食べたアイスクリームはおいしかった。
b. 私は毎朝生卵をかけたごはんを食べる。
c. とけたアイスクリームはおいしくない。

B. 次の文に間違いがあれば下線を引いて訂正してください。間違いがなければ、（ ）に○を書いてください。

例：田中さんがコップを割れた。（ ）
割った

- (1) そうそう、来週は田中さんの結婚式に出るんだった。（ ）
- (2) 昨日は強かった風が吹きました。（ ）
- (3) この2、3日よく咳が出るんです。今はもう大丈夫ですが。（ ）
- (4) 昔は原稿を書いたときに万年筆を使ったものだ。（ ）
- (5) (バスのアナウンス) 運賃は下りたときに運賃箱にお入れください。（ ）
- (6) A：明日までの宿題、やった？
B：やらなかった。（ ）

問3 次の各文の a, b の下線部の意味が同じであれば○、違っていれば×を（ ）に書いてください。

- (1) a. 捨てるのはもったいないから、この料理は僕が食べちゃおう。
b. 風邪をひいてしまって、声が出ないんです。（ ）
- (2) a. 彼女の家に電話をかけるとつい長く話しちゃうんだ。
b. 彼はあっという間に1枚の絵をかいしまった。（ ）

～する

- ・明日 6 時から会議が {ある／あります}。
- ・この 1 週間よく雨が降る。
- ・私たち選手一同は正々堂々戦うことを誓います。
- ・(バスのアナウンス) 料金はお降りになるときに運賃箱にお入れください。

<形>

動詞の辞書形とデス・マス形の形は時間に関しては同じ性質を持つ。例えば、(1)a と (1)b はともに未来のことを表している。

- (1)a. 明日 6 時から会議がある。
- b. 明日 6 時から会議があります。

ここで「～する」で表すものには次のものが含まれる。

- (2) 動詞 辞書形、マス形（ただし「～している、～しています」の形を除く）
- イ形容詞 辞書形、～です
- ナ形容詞 ～だ、～である、～です
- 名詞 ～だ、～である、～です

◆大部分の動詞の「～する」は**未来**を表す。例えば、(3)の「する」は未来を表しており、今は 2 時より前である。これらの動詞の場合、現在を表すには「～している」を使う。例えば、(4)は現在講演が行われていることを表す。

- (3) 田中さんは 2 時から講演をする。
- (4) 田中さんは講演をしている。

存在、所有、状態、知覚に関わる動詞は「～する」の形で**現在**を表すことができる。これらの動詞は通常「～している」の形を持たない。

- (5) 田中さんは部屋にいます（×いています）よ。
- (6) こっちに来てごらん。窓からきれいな夜景が見える（？見えている）よ。

動詞の可能形は普通「～している」の形にはならない。これは、可能形が通常、主語が持つ性質を表すことによる。

- (7) 田中さんは中国語が話せる（×話せている）。
- (8) 今日は暖かいから海で泳げる（？泳げている）。

◆「～する」には**繰り返し・習慣**を表す用法もある。

- (9) この 1 週間よく雨が降る。
- (10) 私は毎晩 10 時には寝る。

こうした用法の場合、「～する」には「今も～だ」という意味が含まれる。一方、対応する「～した」には「今は～ではない」という意味が含まれる。例えば、(9)'には今は雨が降っていないという含みがある。

(9)' この1週間よく雨が降った。

(10) 私は（若いころは）毎晩10時には寝た。

◆動詞の中にはそのことを言うことが行為そのものであるものがある。例えば、「約束する」と言うことは「約束する」という行為そのものである。こうした動詞は状態などを表すものではないが、未来を表すわけではない。

(11) 私は来年の1月にあなたに2万円を返すことを約束する。

(12) この船を国立丸と命名する。

こうした動詞には「～（すること）を約束する／誓う／命令する、～を…と命名する／呼ぶ／定義する」などがある。

◆従属節の中で「～する」が使われると、「まだ～していない」という意味になる。「～まえ（に）」節の中で「～する」が使われるのはこのためである。

(13) {○出かける／×出かけた} まえにガスの元栓を閉めた。

また、「～とき（に）（は）」節の中で「～する」が使われると、主節の時間より後という意味になる。例えば、(14)は「パリに行く」のが「カバンを買った」のより後であるということを表す。

(14) パリに行くときカバンを買った。

(15)

～した

- ・ 3時から会議が {あった／ありました}。
- ・ A：昨日までやってた例の映画見た？ B：見なかった。
- ・ A：今やってる例の映画見た？ B：(まだ) 見ていない。
- ・ 彼は立派な学者でした。
- ・ (客が帰るとき) ありがとうございますした。
- ・ 探してた傘、こんなところにあった。
- ・ あいつが怪しいと思っていたが、やっぱり犯人だった。
- ・ そうだ。日曜日は田中君と映画を見に行くんだ った。
- ・ 怪我さえしなければ、この夏休みにはハワイへ行くはずだ った。
- ・ パリへ行ったとき、カバンを買った。
- ・ 朝はまだ強かった風も昼ごろには弱まった。
- ・ 溶けたアイスクリームはおいしくない。

<形>

◆動詞、形容詞（イ形容詞、ナ形容詞）、名詞＋だ、のタ形をここでは「～した」と表す。
この場合も、デス・マスを含む形と含まない形は時間に関する性質は同じである。

(16) 昨日、友だちと食事を {した／しました}。

◆品詞ごとの形は以下の通りである。注意が必要なのは、イ形容詞の場合に、ナ形容詞と同様に「～いでした／～いではありませんでした／～いではなかったです」ということはできないことである（例：○きれいでした／×白いでした）。

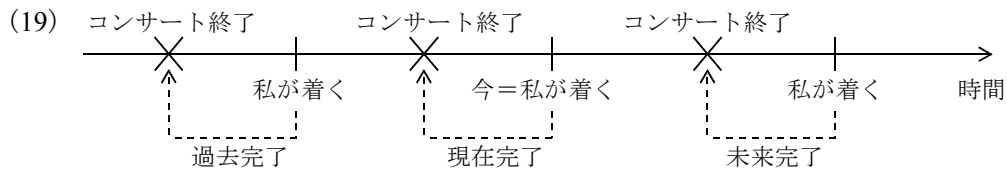
動詞：～た（～だ）	～ました
～なかった	～ませんでした／～なかったです
イ形容詞：～かった	～かったです（×～いでした）
～くなかった	～くありませんでした／～くなかったです
	（×～いではありませんでした）
	（×～いではなかったです）
ナ形容詞／名詞＋だ：	
～だった／～であった	～でした
～ではなかった	～ではありませんでした／～ではなかったです

◆「～した」は今より前（過去）のことを表す。例えば、(17)は3時以後の発話である。

(17) 3時に友だちに電話をした。

◆動詞（状態・性質を表すものを除く）の「～した」には過去の他に完了と呼ばれる用法がある。完了は基準となる時点（基準時）よりも動作・出来事が以前に行われたことを表すものであり、基準時が未来、現在、過去である場合にそれぞれ、未来完了、現在完了、過去完了がある。このうち、「～した」が表すのは現在完了である。

- (18) a. 私が着くまでに、コンサートは終わっているだろう。(未来完了)
 b. コンサートは(もう／さっき)終わった。(現在完了)
 c. 私が着いたとき、コンサートは(もう／既に)終わっていた。(過去完了)



現在完了と過去の違いは否定の場合に現れる。過去の場合の否定は「～なかった」だが、現在完了の場合は「(まだ) ～していない」になる。

- (20) (午後6時ごろ) A: 昼ごはん食べた?
 B: 食べなかった。(? 食べていない) <過去>
 (21) (午後1時ごろ) A: (もう) 昼ごはん食べた?
 B: (まだ) 食べていない。(×食べなかった) <現在完了>

例えば、午後6時に昼ごはんを食べる可能性はないので、この場合の「食べた」は過去となり、その答えは「食べなかった」になる。一方、午後1時に昼ごはんを食べる可能性はある。言い換えると、「昼ごはんを食べる」という行動は可能性としてまだ終わって(完了して)いない。したがって、その答えは「(まだ) 食べていない」になる。

◆現在完了は動作や出来事が終わった直後という意味で使われることが多い。

- (22) (レポートが完成したとき) 終わった。
 (23) (わからなかった問題の答えに気がついたとき) わかった。

感謝や謝罪のことばの「～した」も同じ用法である。

- (24) (買い物を終えた客を送り出すとき)
 ありがとうございます。た。(? ありがとうございます)
 (25) (相手と話しているときに電話がかかってきて電話を切り上げて話に戻るとき)
 失礼しました。(×失礼します)

◆形容詞、名詞+だ、の「～した」は「今は～ではない」という意味で使われることがある。例えば、(26)は「彼」が亡くなったか「彼」と絶交したという場合に使われる。

- (26) 彼は私の親友だった。
 (27) 彼女は若いころきれいだった。

これは属性を表す表現の場合によく見られる現象で、評価や感情を表す表現の場合はこうしたニュアンスは生じにくい。

- (28) あのとき見た映画は面白かった。
 (29) 試験は難しかった。

◆それまでにある判断や考えがあり、それと現実を比べて述べる場合に、「～した」が使われることがある。例えば、(30) Bはそれまでの判断の通り、彼が犯人であるということを述べている。こうした場合に、それまでの認識と現実が同じであることを表すのに「やっぱり、思った通り」などの語が使われることが多い。

(30) A：例の事件であいつが逮捕されたよ。

B：やっぱりあいつが犯人だっただろ。

(31) (彼が怪しいと思っていたが) 彼は犯人ではなかっただ。

この場合に「～した」が使われるのは発話以前に存在する判断が過去のものだからであり、原理は発見や想起の場合と同じである。

◆探していたものを発見した場合や忘れていたことを思い出した（想起した）場合に「～した」を使うことがある。

(32) 探してた傘、こんなところにあつた。(発見)

(33) A：田中さん、どこにいるか知らない？

B：図書館じゃないの？

A：いなかったんだ。(窓の外を見て) あっ、あんなところにいたよ。(発見)

(34) 彼は日本語がうまいなあ。そうか、彼のお母さんは日本人だったな。(想起)

(35) 試験は来週だっただ。(想起)

ただし、想起の場合、状態を表す動詞（状態動詞）以外の動詞の場合は「のだった」を使わなければならない。

(36) 来週の日曜日に彼と食事をするんだった（×した）。

◆「べきだった、はずだった、～するところだった」は「現実には～なかった」という意味を表す。(37)～(39)はいずれも実際にはその出来事は起こらなかったということを表す。

(37) 田中さんはパーティーに出席するべきだった。

(38) パーティーにはもっとたくさんの人が出席するはずだった。

(39) 火事に気づくのがもう少し遅かったら命を落とすところだった。

「のだった」もこうした意味を表せるが、主語は1人称（「私」）に限られる。

(40) {(私は) / 田中さんは} もっと勉強するんだった。

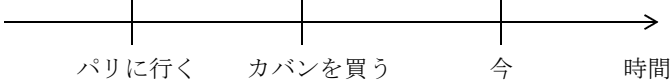
(41) {(×私は) / ○田中さんは} もっと勉強するべきだった。

◆従属節の中で「～した」を使うと、「もう～した」という意味になる。「～あと（で）」節の中で「～した」が使われるのはこのためである。

(42) 手紙を {○出す / ×出した} あとで切手をはっていないことに気づいた。

また、「～とき（に）（は）」節の中で「～した」が使われると、主節の時間より前という意味になる。例えば、(43)は「パリに行った」のが「カバンを買った」のより前であることを表す。

(43) パリに行ったときカバンを買った。

(44) 時間

◆名詞修飾節の中の「～する」「～した」は基本的に文の場合と同じで、今より前の出来事には「～した」、今より後の出来事には「～する」を使う。今と同時の場合は「～している」(＝動詞の場合)か「～する」(＝状態動詞、形容詞、名詞＋だ、の場合)を使う。

(45) このあいだ {×読む／○読んだ} 本は面白かった。

名詞修飾節の中の形容詞や名詞＋だ、の「～する」は普通、属性や性質を表す。そのため、文全体が「～した」であっても「～した」にはならない。

(46) 昨日 {○激しい／×激しかった} 風が吹いた。

ただし、属性などの変化を述べる場合は名詞修飾節の中でも「～した」を使う。

(47) 昨日まで {×激しい／○激しかった} 風が今日はやんでいる。

◆名詞修飾節の中で使われる動詞の「～した」の中には単なる属性を表し、過去や完了を表さないものがある。例えば、(48)の「腐った」はいつ腐ったということを問題にしていない。(49)も同様である。また、「曲がった道」「とがった釘」なども同様の例である。

(48) 腐った卵を食べてはいけない。

(49) 私は生卵をかけたたごはんを食べてきた。

～してしまう

- ・明日までにこの本を読んじゃおう。
- ・えっ、もう食べちゃったの？君、食べるの速いね。
- ・ダイエット中なのに、おいしそうなケーキを見るとつい食べちゃう。
- ・洗い物をしているときに夫の湯呑みを落として割ってしまった。

<形>

◆話しことばでは「～(し)てしまう」に関する形は次のようになる(「てし／でし」が「ちゃ／じゃ」になる)。

～(し)てしまう (～でしまう) ～(し)ちゃう (～じゃう)
～(し)てしまった (～でしまった) ～(し)ちゃった (～じゃった)
～(し)てしまおう (～でしまおう) ～(し)ちゃおう (～じゃおう)

◆「～した」に関連する形式に「～してしまう」がある。

「～してしまう」には 1) 完了 2) 話し手の後悔 の2つの用法がある。

「(意志動詞＋) してしまおう」の場合は**完了**の意味になる。また、「つい、うっかり」

などの副詞を伴う場合は（その動作が話し手の意図したことではないため）意志動詞であっても**後悔**を表す。「～」が無意志動詞の場合は後悔の意味になることが多い。それ以外の場合にどちらの意味になるかは文脈による。

(50) さっさと仕事を終わらせてしまおう。(完了)

(51) 禁酒していたのに、うっかりビールを飲んでしまった。(後悔)

(52) 当たらないだろうと思って宝くじを買ったら、10万円当たっちゃった。(完了)

(53) インフルエンザにかかってしまった。(後悔)

◆単なる過去を表す場合には「～してしまう」は使えない。ただし、意志動詞の場合は後悔の意味として「～してしまう」が使えることがある。

(54) 昨日雨が {○降った／×降ってしまった}。

(55) 1週間前、友だちと映画を {○見た／×見てしまった}。

(56) この間娘の日記を {読んだ／読んでしまった}。(「～してしまう」は後悔)

【まとめの問題】

1. 次の文が適当であるときは○、不適当なときは×を（ ）に書いてください。不適当な場合はその箇所に下線を引いて訂正してください。

(1) A：ちょっと、この望遠鏡見てごらん。

B：（ ）わあ、星がたくさん見えてる。

(2) A：今、雨はどうか。

B：（ ）降らないと思うよ。

(3) A：明日雨かな。

B：（ ）降らないと思うよ。

(4) 雨が午前中にやんでしまったので助かった。（ ）

(5) ようやくレポートが書けてしまった。（ ）

(6) ダイエットしているんだけど、ケーキを見るとつい食べてしまう。（ ）

(7) 昨日は彼と遅くまで飲んでしまった。（ ）

2. （ ）の動詞を適当な形にして、____に書いてください。

(8) A：明日締切のレポート書けた？

B：いや、_____んだ。（書ける）

(9) A：先週締切のレポート書けた？

B：いや、結局_____んだ。（書ける）

3. _____に「べきだった、はずだった、のだった、ところだった」の中から適当なものを選んで書いてください。同じものは1回しか使わないでください。

(10) こんなことになるのなら、彼の忠告を聞いておく_____。

(11) もう少しで車にひかれる_____。

(12) 彼女が来ていれば、パーティーはもっと盛り上がる_____。

(13) 彼はもっと勉強する_____。そうすれば試験に合格していただろう。

4. 正しい方に○をつけてください。両方とも正しい場合は両方につけてください。

(14) 彼は素晴らしい {作家だ・作家だった} が、今はたいしたものを書いていない。

(15) 彼は素晴らしい {作家だ・作家だった} が、思想的には共感できない。

(16) 彼女は有能な {学者です・学者でした}。こんなに早く亡くなるなんて。

- (17) 彼は {面白い・面白かった} 本を貸してくれた。
- (18) 私は辛いときは昔の {楽しい・楽しかった} 時のことを思い出して辛抱した。
- (19) 彼は話し上手で、いつも {楽しい・楽しかった} 話題に事欠かなかった。
- (20) <空港の荷物検査場で>
係員：恐れ入りますが、ボディチェックをさせていただきます。
 <客の体に金属探知器を当てながら> {失礼します・失礼しました}。
 <検査が終わったとき> {失礼します・失礼しました}。
- (21) <指導教官の部屋に入るとき> {失礼します・失礼しました}。
 <指導教官の部屋から出るとき> {失礼します・失礼しました}。
- (22) A：この前貸したマンガ早く返してよ。
 B：ごめん。今読んでるんだ。もうすぐ {読める・読めた} からもうちょっと待
 って。……ふうー。全部 {読める・読めた}。返すよ。どうもありがとう。

§ 4 時間を表す表現（２）－～している、～し続ける、～しつつある、～してある、～したことがある－

<はじめに>

1. 次の各文の a～c のうち、下線部の性質が他と違うものを選んでください。

- (1) a. 田中さんは今中国に行っている。
b. ポスターがはがれている。
c. 雨が降っている。
(2) a. 私が着いたとき、子どもたちは泣いていた。
b. 私が着いたとき、映画は始まっていた。
d. 私が着いたとき、父は病院で亡くなっっていた。

2. 次の文に間違いや不自然なところがあれば下線を引いて訂正してください。なければ、（ ）に○を書いてください。

例：田中さんがコップを割れた。（ ）
割った

- (3) 家を出ようと思ったとき、電話が鳴っていた。（ ）
- (4) 彼は先週その店で食事をしたことがあります。（ ）
- (5) 彼は3日前そのレストランで食事をしています。（ ）
- (6) 昨日2時間ぐらい雷が鳴り続けた。（ ）
- (7) 私が帰るとき、彼らはまだ酒を飲み続けた。（ ）
- (8) 彼の病気も少しずつ治りつつある。（ ）
- (9) 帰ったとき、アイスクリームは完全に溶けつつあった。（ ）
- (10) 窓ガラスが何者かによって割ってあった。（ ）
- (11) 空気を入れ換えるために、窓が開いている。（ ）

～している

- ・雨が降っている。
- ・会社を出るとき雨が降っていた。
- ・ドアが開いている。
- ・彼は今中国に行っている。
- ・私は最近朝食に納豆を食べている。
- ・犯人は3日前、駅前の喫茶店でコーヒーを飲んでいます。
- ・私が映画館に着いたとき、映画は始まっていた。
- ・あのときお金を持っていれば、あのカメラを買っていた。

◆「～している」はある時点で動作が続いていることを表す。

大部分の動詞には「～している」の形があるが、状態を表す動詞にはこの形がない。これは、こうした動詞は「～する」の形で現在のことを表せるためである。

- (1) 田中さんは今、部屋にいる (×いている)。
- (2) 眼鏡を変えたので、今までよりよく見える (×見えている)。

◆動詞の可能形は状態を表すので普通「～している」の形を持たない。ただし、その場で知覚できる一時的な属性の場合は「～している」の形が使われる。

- (3) この本は簡単に {○読める／×読めている}。
- (4) 田中さんは中国語を {○話せる／×話せている}。
- (5) この作文はよく {×書ける／○書けている}。

◆「～している」には大きく分けて、次の2つの用法がある。

- 1) 進行中 (動作や出来事が続いている)
 - 2) 結果残存 (変化の結果が続いている)
- (6) 公園で子どもたちが遊んでいる。(進行中)
 - (7) 窓ガラスが割れている。(結果残存)

どちらの意味になるかは基本的に動詞の意味によって決まっており、主語の状態の変化を表す動詞の場合は結果残存に、そうでない場合は進行中になる。

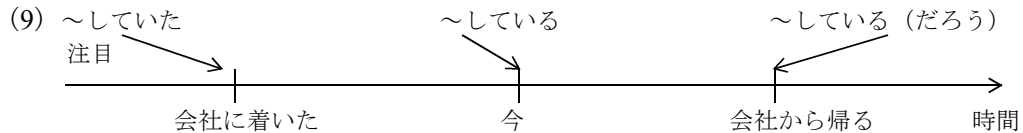
A. 進行中

◆**進行中**は動作や出来事を見た時点で動作や出来事が続いている(た)ということを表す。
見たのが現在か未来の場合は「～している」、過去の場合は「～していた」が使われる。

(8) a. 会社に着いたとき、雨が降っていた。

b. 今雨が降っている。

c. 会社から帰るとき、雨が降っているだろう。



◆状態動詞以外の動詞では現在のことを表すのに「～している」を使う。この場合、「～する」は未来を表す。

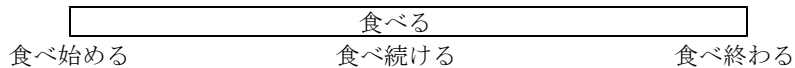
(10) a. (今) 外では雨が降っている。(×降る)

b. (明日) 雨が降る。

～し続ける

- ・雨は3日間降り続けた。
- ・私が帰るときも彼らは話し続けていた。

◆「～し続ける」は動作や出来事が終わっていないということを表す。



◆「～し続ける」は「～時間、～日 (間)」のような期間を表す語と使われることが多い(この場合「～している」より「～し続ける」の方が自然)。逆に、「そのとき」のような1時点を表す語といっしょには使えない。これは「～する、～した」と同じであり、その場合は「～し続けている、～し続けていた」の形を使う。

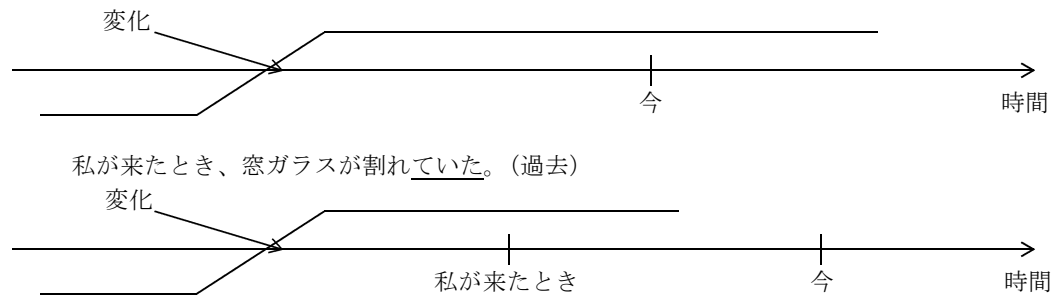
B. 結果残存

◆結果残存は出来事の結果生じた状態がそのときまで続いていることを表す。「そのとき」が現在（未来）なら「～している」、過去なら「～していた」になる。

(11)a. 私が来たとき、窓ガラスが割れていた。

b. (今) 窓ガラスが割れている。

(12) 窓ガラスが割れている。(現在)



◆「～している、～していた」が結果残存の意味になるのは主語の変化を表す動詞（変化動詞）の場合に限られる。例えば、(13)の「ドア」も(14)の「ドア」も変化の対象だが、(14)の「ドア」は主語ではないので、結果残存の意味にはならない。

(13) ドアが壊れている。(結果残存)

(14) 解体業者がドアを壊している。(進行中)

ただし、こうした他動詞文を受身にすると目的語が主語になるので、結果残存の意味になる（進行中の解釈も可能）。

(15) ドアが壊されている。(結果残存／進行中)

◆結果残存の場合、変化という出来事が起こったのは結果を見たときよりも前（過去）なので「～した」が使えるそうだが、目の前に結果（(16)で言えば開いた窓）がある場合は普通「～している」が使われる。

(16)a. あっ、窓が開いている。

b. 窓が開いた。((16)aと同じ意味では使えない)

◆「行く、来る、着く」などの動詞は主語の移動を表すが、移動は位置の変化なのでこれらの動詞の「～している」も結果残存になる（移動の途中という意味にはならない）。例えば、(17)は(18)のような意味を表し、田中さんが飛行機で中国に向かっているといった意味にはならない。

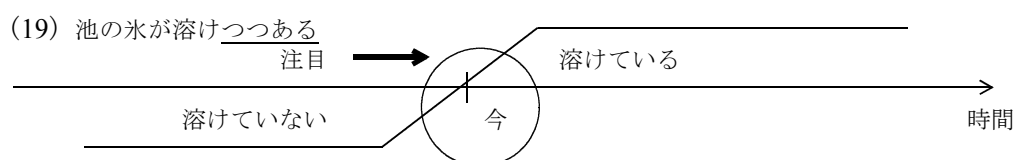
(17) 田中さんは今中国に行っている。

(18) 田中さんは中国に行った＋今中国にいる。

～しつつある

- 池の氷が溶けつつある。
- 事件の真相が明らかになりつつある。

◆「～しつつある」は**変化の過程**を表す。



「～している」で変化の過程を表すことも不可能ではないが、「～」が変化動詞の場合は「～している」は結果残存と解釈されるのが普通である。例えば、(20)a は変化の途中という解釈もできるが、普通は完全に氷が水に変わった後の状態を言う文として解釈される。一方、(20)b にはそうした意味はなく、変化の途中という意味しか表さない。

(20)a. 池の氷が溶けている。

b. 池の氷が溶けつつある。

◆「～しつつある」は少し硬い表現である。また、「～しつつない」という言い方はない。なお、「生まれる、死ぬ」には過程がない（と考えられているため）「生まれつつある、死につつある」という言い方は普通使われない。

(21) ×赤ちゃんが生まれつつある。

(22) ×ゴキブリが死につつある。

ただし、「生まれる」の場合、抽象的な用法では「～しつつある」も使える。

(23) 外国人との共生を目指す全国的な動きが生まれつつある。

～してある

- 金庫には鍵がかけてあった。
- 空気を入れ換えるために、窓が開けてある。
- 日本語の試験があるが、漢字を勉強してあるから大丈夫だ。

◆**結果残存**を表すもう一つの形式に「～してある」がある。

「～してある」は他動詞とともに使うことが多い。これは、「～してある」が動作主の存在を含まないためである。

(24) 窓が開けてある。(開いている／×開いてある／×開けている)

◆「～されてある」（「～」は他動詞）は古い言い方で、現在ではほとんど使われず、代

わりに「～されている」が使われる。

(25) ? 壁にきれいな絵がかけられてあった。(現在では「かけられていた」が普通)

◆「～してある」は動作主の存在を含む表現であるため、目的や理由を表す表現がある場合には「～してある」が使える。逆に、自然現象の結果の状態を表す場合は「～してある」は使いにくい。

(26) ○朝一番の授業のときは教室が寒いので、暖房が入れてある (×入っている)。

(27) ×昨夜の風で壁のポスターがはがしてあった (○はがれていた)。

「～されている」(「～」は他動詞)と「～してある」はどちらも動作主の存在を含むが、「～してある」には「～によって」などの形で動作主を入れることはできない。

(28) ×部屋の鍵が何者かによって開けてあった (○開けられていた)。

◆「～してある」には何かのための準備という意味もある。

(29) 試験のためにたくさん漢字を勉強してある。

この意味の「～してある」は「～しておく」に近いが、「～しておく」は動作で「～してある」は状態という違いがある。したがって、(29)に意味的に近いのは(30)である(「～しておく」ではない)。

(30) 試験のためにたくさん漢字を勉強しておいた。

C. 繰り返し

◆同じ動作・出来事が繰り返された場合にも「～している」が使われる。これには同じ主語による動作・出来事が繰り返しの場合と複数の主語による動作・出来事の場合がある。

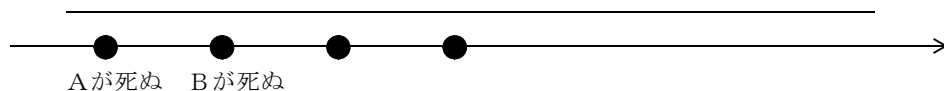
(31) 田中さんは毎日6時に起きている。

(32) 世界では今でも栄養失調で毎日多くの子どもが亡くなっている。

(33) 田中さんは毎日6時に起きている



(34) 毎日多くの子どもが栄養失調で亡くなっている



◆「～する」にも繰り返しの用法があるが、「～している」の方が(一時的・恒常的)なニュアンスが強い。

(35) 田中さんは最近1か月間禁煙を {○している／×する}。

(36) 日本では大みそかにそばを {?食べている／○食べる}。

D. 経験・記録

◆ある動作・出来事が主語の**経験・記録**になる場合にも「～している」が使われる。

(37) 田中さんは一橋大学を卒業している。

(38) この橋は一度架け替えられている。

◆この用法では過去を表す語句（「若い頃、3日前」など）が使われていても（「～た」や「～していた」ではなく）「～している」が使える。

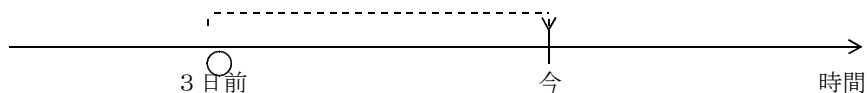
(39) 田中さんは3日前その店で食事をしています。（経験・記録）

(40) 田中さんは私が3日前その店に行ったとき食事をしていました。（進行中）

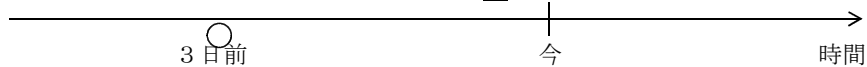
(39)は行方不明の田中さんを探している刑事がその店の店員から聞いた情報を報告しているといった場合に使われる。この場合、この文を言っている刑事は田中さんを直接見ていなくてもよい。一方、(40)のような進行中の文は田中さんを直接見た場合に使われる。

こうした場合の「～している」は過去の出来事を今（発話時）と関連づけるために使われている。「～した」にするとそうした関連づけはなくなる。

(41) 田中さんは3日前この店でうどんを食べている。



(42) 田中さんは3日前この店でうどんを食べた。



「～している」と「～した」は両方使える場合も多いが、書かれたものなどが具体的に残っている場合は「～している」の方が自然である。

(43) 田中さんは論文の中で次のように述べている（？述べた）。

◆経験・記録の「～している」は過去の動作・出来事の影響が発話時にも残っていることを表すのにも使われる。例えば、(44)では「彼はスワヒリ語がうまい」という現在の事実と「彼は若いころアフリカに住んでいた」という過去の出来事を関連づけるために「～している」が使われている。

(44) 彼は若い頃アフリカで暮らしている。だから、スワヒリ語がうまい。

(45) この橋は5年前に壊れている。だから、洪水でまた壊れないか心配だ。

～したことがある

- ・彼は心臓病で入院したことがある。
 - ・私は納豆を食べたことがない。

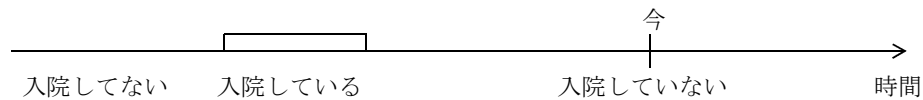
◆経験・記録を表すもう一つの形式が「～したことがある」である。

「～している」が動詞にしか接続しないのに対し、「～したことがある」は動詞、形容詞、「名詞+だ」の全てに接続する。

- (46) この会の議長がいなかったことがある。
(47) 大学院の入試の外国語がやさしかったことがある。
(48) ゼミの半分以上が留学生だったことがある。

「～したことがある」は過去から現在までの中で特定の時期（または時点）だけ「～」だったということを表す。

- (49) 彼は心臓病で入院したことがある。



もし、過去の時点から今までその動作・状態が続いていれば「～している」が使われる。

◆「～したことがある」は発話時からある程度離れた時点のことにしか使えない。

- (50) ×彼は先週その店で食事をしたことがある。(○している)

◆「～している」は「～」が主語の属性として意味のあるものでなければならないが、「～したことがある」にはそうした制約はない。

- (51) ○彼は納豆を食べたことがある。(？食べている)

(「飲んでいる」は進行中としては問題はないが、経験・経歴としては不自然)

◆「～することがある」は「ときどき～する」という意味を表す。

- (52) 彼はゼミを無断欠席することがある。

E. 完了

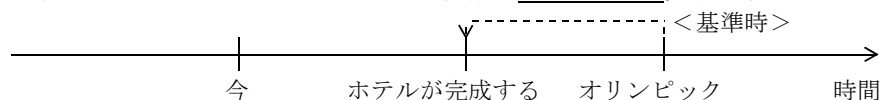
◆完了は基準時以前に動作・出来事が終わることを表し、未来完了、現在完了、過去完了がある。現在完了は「～した」、未来完了は「～している（だろう）」、過去完了は「～していた」で表される。

- (53) 来年のオリンピックまでにこのホテルは完成しているだろう。(現在完了)

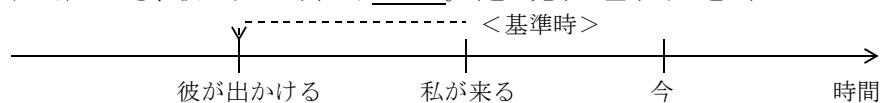
- (54) たった今宿題が終わった。(現在完了)

- (55) 私が来たとき、彼は（既に）出かけていた。(過去完了)

・来年のオリンピックまでにこのホテルは完成しているだろう。(未来完了＝基準時が未来)



・私が来たとき、彼はすでに出かけていた。(過去完了＝基準時が過去)



◆「～した」と「～していた」では時間関係が異なる。

(56) 私が来たとき、彼は出かけた。

(「私が来る」と「彼が出かける」のは同時、または、「私が来る」に続いて「彼が出かける」が起こる)

(57) 私が来たとき、彼は出かけていた。

(「私が来る」のより「彼が出かける」の方が先)

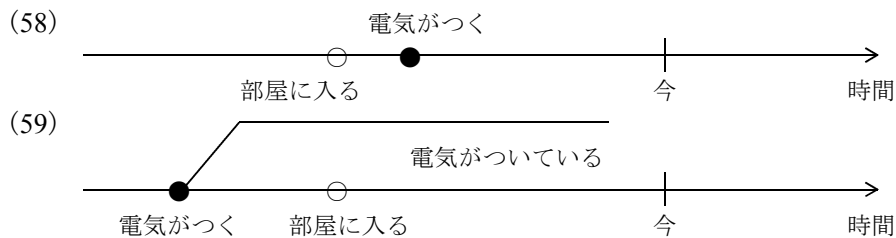
これは複文 (complex sentence) のときだけではなく、連文 (sentence sequence) の場合でも同様に言える。

(58) 彼が部屋に入った。電気がついた。

(「彼が部屋に入る」のに続いて「電気がつく」)

(59) 彼が部屋に入った。電気がついていた。

(「彼が部屋に入る」より前から「電気がつく」)



F. 反事実

◆「～している (た)」は事実と反対の内容を述べる**反事実**を表すためにも使われる。

(60) お金を持っていれば、あのカメラを買っている。

(61) あのときお金を持っていたら、あのカメラを買っていた。

◆反事実を表す文は理由を表す文と同じ事実関係を表す。

(62) お金がないので、あのカメラを買わない。

両者の違いは、反事実の文の方が話し手の後悔やほっとした気持ちを表す点にある。

(63) a. あのとき彼が助けてくれなかったら、私は溺れ死んでいた。(反事実)

b. あのとき彼が助けてくれたから、私は溺れ死ななかった。(理由)

G. 思考動詞と「～している」

◆「考える、思う、(～と) 見る、信じる」などの動詞を思考動詞と言う。思考動詞の「～している」の形には注意が必要である。

「と思う、と考える」はその場での判断を表すことが多い。「と考える」は話しことばでは使われない。

(64) A : 明日の天気はどうか。

B : 晴れると思うよ。(? と思っている)

「と思っている、と考えている」はある程度継続している考えを表す。

(65) A : 夏休みどうするつもりですか。

B : 国へ帰ろうと思っています。

「～と思われる、～と考えられる」は論文などで「～と思う」の代わりに使われる。

(66) この計画は成功したと { 思われる／考えられる }。

「～思われている、～考えられている」は話し手の判断ではなく、一般的な考え方が～だ、ということを表す。この場合、話し手は「～」の内容に賛成していなくてもよい。

(67) この計画は成功したと { 思われている／考えられている }。

(68) ○この計画は成功したと { 思われている／考えられている } が私はそう思わない。

「～と思われる／～考えられる」では話し手は「～」の内容に賛成している。

cf. (69) ×この計画は成功したと { 思われる／考えられる } が、私はそう思わない。

【まとめの問題】

1. 次の文の a, b の下線部の意味が同じなら○、違うなら×を () に書いてください。

(1) a. あれっ、窓ガラスが割れている。昨日は問題なかったのに。()

b. この魚は食べられない。腐っているよ。

(2) a. 田中さんは大阪に行っている。()

b. 台風が日本に近づいている。

(3) a. 外では雨が降っている。()

b. 料理で使うために母がバターを溶かしている。

2. 正しい方に○をつけてください。

(4) 寝ようと思って布団に入ったとき、電話が {鳴った・鳴っていた}。

(5) 会社から駅までずっと雨が {降った・降っていた} のに、駅に着くとすぐに {やんだ・やんでいた}。

(6) 彼は今部屋で仕事を {します・しています} が、もうすぐこちらに {出てくる・出てきている} と思います。

(7) 向こうの部屋にハンカチが {落ちました・落ちていました}。

(8) もしもし、ハンカチが {落ちました・落ちています} よ。

3. 次の各文の a～d のうち、下線部の性質が他と違うものに○をつけてください。

(9) a. 田中さんは中国に行っている。

b. 吉田さんが今家に来ている。

c. 山田先生は宿に到着されています。

d. 佐藤さんは宿に向かっています。

(10) a. 私が来たとき、窓は開けられていた。

b. 私が通ったとき、男性が殴られていた。

c. 壁のポスターがはがされていた。

d. 机の上に小さな箱が置かれられていた。

4. () にそこに書かれている文字で始まる動詞を適当な形にして入れてください。

(11) 空気を入れ換えるために、窓が (開)。

(12) 地震のあと部屋に入ったら、皿やコップが (割)。

(13) 正しい答えがだれかによって (消)。

(14) カレーが (作) から、お昼はそれを温めて食べてください。

5. _____に適当な文を書いて、まとまりのある表現にしてください。

(15) 彼は高校のときアメリカで勉強している。だから、_____。

(16) この橋はたくさん本を読んでいる。だから、_____。

(17) 彼女はいろいろな国に行っている。だから、_____。

6. 動作・出来事Aが動作・出来事Bよりも先に起こることを「A<B」で表すことにします。()の中の時間関係を表すように文を作ってください。

(18) 雨が降り始める < 私が会社を出る < 今

→私が_____とき、_____。

(19) 私が声をかける < その子が泣き出す < 今

→私が_____とき、_____。

7. 次の文と同じ内容を表す文を作ってください。

(20) 彼の忠告を聞いたので、失敗をしなかった。

→_____。

(21) 彼が助けたので、彼女は溺れなかった。

→_____。

(22) 彼女が手伝ってくれたので、レポートの締切に間に合った。

→_____。

8. 「思う、思っている、思われる、思われている」の中から適当なものを1つ選んで、()に書いてください。

(23) 日本の大学生は国際情勢に対する関心が低いと()ようだ。

(24) 私は以前から、日本の大学の学生の数が多すぎると()。

(25) 山田：佐藤さん、どこにいるか知らない？

田中：図書館にいると()よ。

(26) (論文) 日本経済を立て直すためには構造改革が必要であると()。

§ 5 終助詞ーだろう、だろうか、ね、よ、よね、ではないか、 のではないか、否定疑問文ー

＜はじめに＞

1. 次の文の最後のイントネーションが上昇調（↑）の方がいい場合には○、そうでない場合には×を（ ）に書いてください。

(1) (レストランの前で)

田中：林さんはこの店で食べたことがあるでしょ。() おいしいですか。()

林：おいしいと思いますよ。

(2) (レストランの前で)

田中：この店、初めてですけど、おいしいでしょうか。()

林：私も食べたことがないので、よくわかりません。

(3) (デパートの宝石売り場で)

客：すみません。このダイヤ見せてください。

店員：こちらでございますね。() はい、どうぞ。

(4) A：ねえ、僕の時計知らない。()

B：机の上にあるじゃない。() よく探してよ。

(5) A：明日の天気、どうだろうか。()

B：晴れるんじゃない。()

(6) 田中：山田さん、フランス語の辞書持ってなかった。()

山田：うん、持ってるよ。

2. 次の文の（ ）に「ね、よ、よね」のどれかを入れてください。どれも入れない方がいいときは×を書いてください。

(7) A：この本面白いです（ ）。読んでみてください。

B：うん、読んでみます。

(8) 田中：山田さんは絵が上手です（ ）。

山田：そんなことないですけど、ありがとうございます。

(9) A：確認したいんだけど、明日の田中先生の授業は休講だ（ ）。

B：そうだよ。間違いないよ。

(10) 先生：田中君は広島生まれだったよね。

田中：はい、そうです（ ）。

(11) 山田：田中君は広島生まれだったよね。

田中：うん、そうだ（ ）。

◆日本語では文の最後に付く助詞によって話し手が伝えたい微妙なニュアンスを言い分けることが多い。こうした助詞を**終助詞**と言う。ここでは「よ、ね、よね」のような終助詞の他に、「だろう、ではないか、のではないか」も終助詞に含めることにする。

だろう

- ・先月、新宿のイタリアンの店で食事したでしょ。↑あの店つぶれたんだって。
- ・向こうに赤い屋根の家が見えるだろ。↑あれが僕の家だよ。

◆「だろう」には確認や聞き手の知識を活性化する用法がある。

「だろう」には「たぶん～だ」という話し手の気持ち（**推量**）を表す用法もあるが、この場合、話しことばでは普通「と思う」「だろうと思う」が使われる。

- (1) A：この機械の使い方、わかりますか。
B：見せてください。ここを押せばいい{？でしょう／○だろうと思います}よ。
- (2) A：部屋の鍵どこに置いたかな？
B 1：机の上{？だろう。／だろうと思うよ／だと思うよ}。(推量)
B 2：机の上だろう。↑ (聞き手の知識の活性化)

◆「だろう」が確認や聞き手の知識の活性化を表すときは「だろ」「でしょ」の形になることが多い。また、文末のイントネーションは上昇調になる。

- (3) 田中さんもハイキングに行くでしょ。↑
(4) 高校の同級生に田中さんっていたでしょ。↑彼女結婚するんだって。
(5) 向こうに赤い屋根の家が見えるだろ。↑あれが僕の家だよ。

「だろう」の**確認**は文の内容について話し手がある程度の確信を持っているが完全な自信はないため、聞き手にたずねて正しいかどうかをはっきりさせたい場合に使われる表現である。例えば、(3)では話し手は「田中さんがハイキングに行く」ということが正しいという見込みを持っているが、断定する自信はないので聞き手にたずねてそれが正しいことを確認している。

一方、対話では話の内容について聞き手が話し手と同程度の情報を持っていないと話が円滑に進まないため、話し手は聞き手と自分の知識と同程度にするために調整をしながら話をする。このとき、(4)のようにその情報について聞き手が知っているはずだが今はそのことに関心がない、または、(5)のように聞き手が気がついていないと思った場合、話し手は聞き手の関心をその情報に向けるようにする。これを**聞き手の知識の活性化**と言う。

◆「だろう」には相手を**非難**する用法もある。この場合、文頭に「だから」が来ることが多く、イントネーションは上昇調にならない。

- (6) A：試験、あんまりできなかった。
B：だから言っただろ。↓もっと勉強しておけって。

だろうか

- ・明日も雨だろうか。
- ・（初めて入る店の前で知り合いに）この店はおいしいでしょうか。
- ・彼は本当に犯人なのであろうか。
- ・共通語はいつごろから使われるようになったのだろうか。

◆「だろう」と似た形式に「だろうか」がある。

「だろうか」は話し手の**不確かな気持ち**を表す表現である。例えば、(7)は明日も雨が降るかどうかわからないという話し手の気持ちを表している。これは話し手の心理を表しているだけなので、聞き手がいなくてもよく、独り言でも使える。

(7) 明日も雨だろうか。

「だろうか」は話し手の不確かな気持ちを述べただけなので、聞き手がいる場合でも聞き手に尋ねているわけではない。そのため、上昇調のイントネーションにならない。例えば、田中さんが山田さんと食事をする店を探しているとする。このとき、自分が入ったことはないが山田さんは入ったことがあることがわかっていれば次のように言う。

(8) 田中：この店はおいしいですか。↑

一方、自分も山田さんも入ったことがない店の場合、山田さんに尋ねても仕方がないが、自分もこの店がおいしいかどうか判断できないという気持ちを山田さんに伝えることはできる。そのときには(9)のように言う。ただし、尋ねてはいないので（聞き手に尋ねていることを表す）上昇調のイントネーションにはならないのである。

(9) 田中：この店はおいしいでしょうか。（×↑）

◆「だろうか」はより強く疑いを表すこともある。例えば、(10)は話し手が彼が来ることを疑っている場合に使われる。特に、話し手が文の内容と反対のこと（この場合なら「彼が来ない」こと）を想定している場合を**反語**と言う。

(10) 彼は本当に来るのだろうか。

◆「だろうか」は「疑問語～のだろうか」の形で文章の主題を表すのに使われることがある。例えば、(11)の(1)文はこの文章の主題（話題）が「始球式を始めた人」であることを示すために使われている。

(11) 梅雨が明けた“太陽の季節”に石原慎太郎・東京都知事の始球式で記念大会が開幕した。振りかぶって投じた白球は意に逆らい、門真市・松下電器の宮崎の背後を通過した。第1回の西久保弘道東京市長から数えて同知事は31人目となる。

(1) 始球式はだれが始めたのであろうか。1908（明治41）年11月22

日、早大・戸塚球場でリーチ・オール・アメリカン（リーチ運動具会社が結成した球団）と早大の試合が行われた。この試合で早大の大隈重信総長が投げたのが始まりという。米国は2年後の10年、ワシントンでウィリアム・タフト大統領が投げたのが最初、とあるから日本の方が早かった。（中略）

戦争直後の始球式では、安井誠一郎都知事がボールをプレゼントされるのを見て、スタンドから「いいなあ、ヤミ値で250円もするんだ」の声が飛んだとか。石原知事は記念のボールを惜しげもなく一塁側スタンドに投げ入れた。始球式もまた歴史を語る。（毎日新聞朝刊 1999.7.24）

ね

- ・ A：今日はいい天気ですね。
- B：そうですね。
- ・ 山田：田中さんは絵が上手ですね。
- 田中：そんなことはないですよ。
- ・ 山田：田中さんのお宅はここですね。↑
- 田中：ええ、そうです。
- ・ この絵、きれいね。

◆「ね」は聞き手に対する同意や確認を表すために使われる。

◆「ね」は聞き手が知っていると思われることを表すときに使われる。例えば、(12) Aは聞き手も今日の天気を暑いと感じていると想定して「ね」を使っている。こうした場合、聞き手が同意する場合には(12) B 1のようにやはり「ね」をつけなければならない。なお、(12) B 2のように同意しない場合には「ね」をつけなくてもよい。

(12) A：今日は暑いですね。（？暑いです）

 B 1：そうですね。（×そうです）

 B 2：そうでもないと思います（よ）。（？そうでもないと思いますね）

「ね」は聞き手に関することを述べる場合にも必要である。例えば、(13)の「山田」は「田中」が絵を描くのを見て絵が上手だと言っている。この場合、「絵が上手だ」というのは聞き手である田中に関わることなので「ね」をつけなければならない。これは、「絵が上手だ」という情報を他の人から聞いたという場合でも同様である。この場合、イントネーションは上昇調にならない。

(13) 山田：田中さんは絵が上手ですね（？上手です）。（×ね↑）

 上手だそうですね。（×上手だそうです）

 田中：そんなことはないですよ。

◆話し手は知っているが聞き手は知らないことを聞き手に伝える場合は「ね」は使えない。「よ」や「よね」は使える。

(14) 頭が痛いんです {×ね／○よ／○φ}。

◆「ね」は単なる応答文では普通使われない。

(15) 吉田：田中さんは学生ですか。

田中：はい、そうです {φ/×ね}。

「ね」が使われるのは答えるのに考える必要がある場合である。(16)のような場合「ね」はなくてもいいが、「ね」をつけると表現が柔らかくなる。

(16) 客：ここから新宿まで何分ぐらいかかりますか。

車掌^{しゃしやう}：30分ぐらいです {φ/ね}。(考える必要あり)

(17) 吉田：田中さんはおいくつですか。

田中：25歳です {φ/×ね}。(考える必要なし)

◆「ね」には**確認**を表す用法もある。「ね」は話し手の中には疑いはないが、聞き手が自分と同じ考えかどうかわからないのでその点を確認するという場合に使われる。こうした確認を**念押し**と言う。この場合、イントネーションは上昇調になる。

(18) 客：(店員が見せているセーターを指して)それをください。

店員：こちらでございますね。↑

(19) (シンポジウムの受付をしている山田さんに友人の吉田さんが頼んでいる)

吉田：田中さん、呼んでくれないかな。

山田：田中さんだね。↑

◆「ね」と「だろう」は似ているが、確認の意味の「だろう」は話し手の中に疑いがある場合にしか使われない。(20)の1の段階では駅員は客の行き先が「新大阪」であることに疑いを持っていないので「ね」しか使えない。ところが、客2の発言で客の行き先が「新大阪」であることに疑いが生じたので、2の段階では逆に「だろう」しか使えない。

(20) 客1：新大阪まで大人1枚。

駅員1：新大阪までですね。↑ (×新大阪まででしよ。↑)

客2：新神戸まで。

駅員2：お客さん、新大阪まででしよ。↑ (?新大阪までですね。↑)

◆「ね」にはこれ以外に女性のことばとしての使い方があり。日本語には伝統的に女性が使うことば(**女性語**)と男性が使うことば(**男性語**)が別々に存在してきた。この違いは特に助動詞などの文末表現にはっきりと現れる。ただし、現在の若い女性はこうした女性語を使わなくなっており、男女とも男性語を使う傾向が強くなっている。しかし、現在でも小説や映画、ドラマなどでは女性語が使われる傾向が強い。なお、男性が女性語の形を使うと奇妙に聞こえることが多いので注意が必要である。

(21)a. あの絵、きれいだね。(男性)

b. あの絵、きれいね。(女性のみ)

(22) 女性語と男性語（「ね」の部分は「よ」「よね」でも同じ）

	男性	女性
動詞	普通形+ね／～ます・です+ね 例：行く <u>ね</u> ／行きます <u>ね</u>	普通形+（わ）ね／～ます・です+（わ）ね 例：行く（わ） <u>ね</u> ／行きます（わ） <u>ね</u>
イ形容詞	白い <u>ね</u> ／白いです <u>ね</u>	白い（わ） <u>ね</u> ／白いです（わ） <u>ね</u>
ナ形容詞	～だ+ね／～です+ね 例：静か <u>だね</u> ／静か <u>ですね</u>	～ね（～だ+わね）／～です+（わ）ね 例：静か <u>ね</u> （静か <u>だね</u> ）／静か <u>です</u> （わ） <u>ね</u>
名詞+だ	学生 <u>だね</u> ／学生 <u>ですね</u>	学生 <u>ね</u> （学生 <u>だね</u> ）／学生 <u>です</u> （わ） <u>ね</u>

女性語の特徴は「だ」の代わりに「ね」「よ」「よね」が使われることである。「わ」が使われることがある（「わ」は「だわ」となる）が、「わ」は年輩の女性が使う形である。

よ

- ・ハンカチが落ちましたよ。
- ・友だちに吉田って奴がいるんだけど、こいつが面白いんだよ。
- ・A：遊びに行こうと。
- B：宿題を先にやった方がいいと思うよ。この前も間に合わなかったでしょ。

◆「よ」は(23)(24)のように聞き手の注意を引くために使われる。このとき、(24)のように指しているものが聞き手にも見えている場合には「よ」を付けても付けなくてもいいが、(23)のように指しているものが聞き手に見えていない（指しているものの存在を聞き手が気づいていない）場合は「よ」を付けないと不自然になる。

(23) もしもし、ハンカチが落ちましたよ。

(24) （本を手渡ししながら）これは君の本だよ。

◆(25)のような相手の意見を求める質問文に対する答えの場合「よ」を付けた方が自然な場合が多い。

(25) A：明日の天気はどうか。

B：今、こんなに降ってるんだから明日は雨だよ。↓

「よ」を下降調で言うと話し手の主張を伝えるという意味になるが、(26)Bのように上昇調で言うと、聞き手の反応を見ながら話すニュアンスが出て丁寧になる。

(26) A：明日はハイキングに行くんだ。

B：でも、天気予報だと明日は雨だよ。↑

例えば、(26)Bでは「明日ハイキングに行く」と言う相手に、天気予報で自分が持っている「明日は雨が降る（可能性が高い）」という情報を伝えたいのだが、単に伝えると、

ハイキングを楽しみにしている聞き手をはっきりさせるかもしれないので、「天気予報では雨だが、その場合はどうするのか」という質問を含むニュアンスで話すことによって聞き手に対する配慮を表している。

「よ」は応答文にも使えるが、単なる答えの場合はやや使いにくい。

(27) A：田中さんは会社員ですか。

B：はい、そうです { ϕ ／?よ}。

(27) Bで「よ」が使えるのはその後に言いたいことが続く場合である。

(27)' B：はい、そうですよ。そう見えませんか？

「よ」は相手の注意を引きたいときに使われるが、目上の人には使わない方がよい。(28)のような場合は何もつけないか「けど／が」をつけるのが自然である。

(28) 先生、ちょっとお話があるんです { \times よ／ \bigcirc けど／ \bigcirc ϕ }。

cf. (友だちに) ちょっと話があるんだよ。

よね

- ・ A：キムタクって、かっこいいよね。
- B：そうだよね。
- ・ 山田：田中さんって、字がきれいよね。
- 田中：そんなことないよ。
- ・ この計算、合ってるよね。

◆「よね」は「よ」(聞き手の注意を引く)と「ね」(聞き手に念押しをする)の性質を共に持った終助詞である。「よね」は「よ」よりも「ね」に近い性質を持っている。

◆「よね」は「ね」と同じく同意を表す場合に使われる。ただし、「ね」に比べて「以前から知っていた」というニュアンスが強い。例えば、(29)は「足つぼマッサージ」に以前いっしょに行ったことがある2人が再びマッサージに行ったという場合に使われる。もし、AまたはBがマッサージに行くのが初めての場合には「ね」の方がふさわしい。

(29) A：足つぼマッサージって気持ちいいよね。

B：そうよね。

(30) A：今日はいい天気です {?よね／ \bigcirc ね}。

B：そうです {?よね／ \bigcirc ね}。

同様の理由で(30)では「よね」はやや不自然である。天気に関する情報はそのとき初めて知るのが普通だからである。

◆「よね」も「ね」と同じく確認を表すが、「ね」よりも聞き手に尋ねるというニュアンスが強い。したがって、自分が確信が持てないことについては「ね」よりも「よね」の方が自然である。

(31) 僕、ここに鍵置いたよね。(？ね)

逆に、念押しをする場合には「よね」は使いにくい。

(32) 客：新大阪まで1枚。

駅員：新大阪までですね。(×よね)

ではないか（じゃないか）

- ・この答、間違ってるじゃないか。↓
- ・この本、面白いじゃない。↓
- ・駅前に映画館ができたじゃない。↑あそこに行ってみない？
- ・A：(テレビドラマを見ながら) この人が犯人じゃない？↑
B：違うと思うな。
A：(ドラマが終わったとき) やっぱりこの人が犯人じゃない。↓

<形>「ではないか」には次のようないくつかの形がある。このうち、(否定疑問文以外で) 上昇調のイントネーションを取れるのは「じゃない」だけである。

ではないか、では、じゃないか、じゃない、じゃないですか

「ではないか」は動詞、形容詞、名詞につくことができるが、品詞によって意味が異なるので注意が必要である。

(33) 「～ではないか」の意味

動詞・イ形容詞	普通形＋ではないか↓ (×↑) (「じゃない」は↑も可能) 例：やっぱり雨が降った <u>じゃないですか</u> 。↓ (難しくなくて言ったけど) 試験、難しかった <u>じゃない</u> 。↓
ナ形容詞・名詞＋だ	～＋ではないか↓／～＋じゃない↑ or ↓ (知識の活性化、非難) ～＋ではないか↑ (質問) 例：これが正しい答 <u>じゃないですか</u> 。↓ (非難、発見) これが正しい答 <u>じゃないですか</u> 。↑ (否定疑問文)

まず、動詞とイ形容詞の場合は直接「ではないか」がつく。また、「知識の活性化、非難」といった「否定疑問文」以外の意味にしかない。なお、「じゃない」以外は上昇調のイントネーションを取らない。

(34) 今日は降らないって言うから傘置いていったら降ったじゃないか。↓ (×↑)

質問の場合は「のではないか」の形になる。

(35) 明日は雨が降るんじゃないか。↑

ナ形容詞と名詞＋だ、の場合も直接「ではないか」がつくが、「知識の活性化」などの

意味になることも「否定疑問文」の意味になることもある。否定疑問文のときはイントネーションは上昇調になる。否定疑問文以外で上昇調になるのは「じゃない」だけである。例えば、(36)は知識の活性化の例であり、(37)は否定疑問文の例である。

(36) 山田：林君のお父さん、社長さんじゃないですか。↓将来は跡を継ぐんでしょ。

林：まだわかりませんよ。

(37) 山田：田中さんって、田中建設の社長の息子さんじゃないですか。↑

田中：ええ、そうです。

◆「ではないか」は下降調イントネーションの場合、相手に対する非難を表す。例えば、(38)では電車に乗り遅れる原因を作ったBを非難している。

(38) A：急がないと電車が出てしまいますよ。

(連れのBが小銭を探しているあいだに電車は出てしまう)

A：ほら。乗り遅れてしまったではないですか。↓

「ではないか」には(39)のように聞き手を励ます用法もある。

(39) A：試験だめだったよ。

B：1回落ちたぐらいでなによ。また来年がんばればいいじゃない。↓

◆下降調イントネーションの「ではないか」は聞き手の知識の活性化を表すこともあるが、この用法で使えるのは「じゃない」と「じゃないですか」という形に限られる（上昇調イントネーションを取れるのは「じゃない」のみ）。

(40) あそこに赤い屋根の家が見える {じゃないですか↓／じゃない↑}。

(41) A：高校の時に林君っていたじゃない。↓／↑彼、今度結婚するんだって。

B：へえー。だれと？

◆「だろう」「ではないか」は聞き手の知識を活性化するものなので、情報は聞き手が知ることができるものでなければならない。例えば、(42)が使えるのは聞き手が窓から外を見ている場合か、聞き手が窓から三角の屋根の家が見えることを知っている（ことを話し手が知っている）場合に限られる。

(42) 窓から三角の屋根の家が見える {でしょ↑／じゃない↑}。

もし、聞き手が窓から三角の屋根の家が見えることを知らず、窓から外も見えていない場合には(43)のような前置きの表現を使う。

(43) 窓から三角の屋根の家が見えるんだけど、……。

◆「ではないか」は聞き手がいらない独り言でも使うことができ、話し手の「発見」を表す。例えば、(44)はそれまでまずいと思って納豆を食べたことがなかった人が初めて食べてそれがおいしかったときの言い方だが、この場合には聞き手はいないか、いてもその存在が問題とならないので「だろう」は使えない。

(44) （独り言で）納豆ってうまい {じゃないか／×だろう}。

「だろう」は聞き手が話し手と同じ意見であると考えられる場合に使われる。例えば、(45) Aは話し手の発見を表すため「だろう」は使えないが、BではAの発話からAが「納豆はうまい」と思ったということが見込めるため「だろう」が使える。逆に、既にAの知識は活性化されているため、「ではないか」は使えない。

(45) (Aは納豆を初めて食べた)

A：納豆ってうまい {じゃないか／×だろう}。

B：うまい {×じゃないか／だろう↑}。

のではないか

- ・この答は違うのではないか。
- ・この本は難しいんじゃないですか。
- ・田中さんは病気なんじゃない。
- ・失業対策が今最も必要なことなのではないか。

<形> 「のではないか」にも次のようないくつかの形があるが、基本的に全て上昇調のイントネーションを取る。

のではないか、のでは、んじゃないか、んじゃない、んじゃないですか、んじゃない

ナ形容詞と名詞+だ、の場合にも「～なのではないか」という形があるが、「～ではないか」の形で「のではないか」の意味になることもある。この場合、イントネーションは上昇調になる。例えば、(46)b と(46)c は同じ形だが、イントネーションによって「ではないか」か「のではないか」が決まっている。

(46)a. 田中さんは病気なんじゃないですか。(のではないか)

b. 田中さんは病気じゃないですか。↓ (ではないか)

c. 田中さんは病気じゃないですか。↑ (のではないか)

◆「～のではないか」は「～」の内容が正しいと思うが、はっきりそうだとは言えないときに、**断定を避ける**ために使われる。例えば、(47)は「明日雨が降る」ということが正しいと思うがはっきりそうだと言えない（言いたくない）場合に使われる。また、話しことばだけではなく、書きことばでも使える。

(47) 明日は雨が降るんじゃないか。↑

(48) (外から帰ってきた人に) 寒いんじゃない。↑

(49) 日本の景気は当分回復しないのではないか。

◆「～のではないか」には「～」であるという話し手の見込みがあるが、聞き手に尋ねる形を取っているため、話し手の主張を押しつけることなく、丁寧な表現となる。そして、聞き手の誤りを指摘する場合にも使われる。この場合、(51)のように「ではないか」を使うと相手を直接非難することになり、失礼になる。

(50) この答えは違うのではありませんか。↑

(51) この答は違うではありませんか。↓

なお、こうした場合「のではないだろうか、のではないかと思う」などの方がより丁寧な表現になる。

(50)’ この答えは違うのではないのでしょうか。

(50)” この答えは違うのではないかと {思います／思うのですが}。

◆「のではないか」には「のだろう、のかもしれない」などと同じく状況に基づく判断というニュアンスがある。一方、「ではないか」は直接感じたことを述べるときに使われる。

(52) (家の中で) 外は寒いんじゃないか。

(53) (外に出てから) 外は寒いじゃないか。

◆「のではないか」は「かもしれない」と同様の断定を避ける表現として、書きことばで非常によく使われる。

(54) 裁判のドラマは少なくないが、裁判官を主人公にしたテレビドラマとなると、わが国ではあまり例がないのではないか。 (朝日新聞朝刊 1993.1.5)

否定疑問文

- ・山田：田中さん、私に何か隠してない？
田中：いや、隠してないよ。
- ・A：来週の火曜日に美術館に行くことにしよう。
B：でも、火曜日は美術館が休みじゃないですか？

<形>否定文の形をした疑問文を**否定疑問文**と言う。否定疑問文は「ではないか」「のではないか」と形が似ているが、違いもある。

意志動詞の場合、「～しない (か) / ～しません (か)」の形は否定疑問文にならない。

(55) ×田中さんはパーティーに行きませんか。↑

(55)は田中さんと話しているときなら「勧誘」の文としては正しいが、否定疑問文にはならない。第三者である田中さんのことを話している場合はどのような文脈でも使えない。こうした場合は文末に「のだ」を使う。(55)’は「田中さん」が2人称(聞き手)でも3人称(第三者)でも使える。

(55)’ 田中さんはパーティーに行かないのですか。↑

意志動詞の「～した」や状態動詞、イ形容詞では否定疑問文と「のではないか」の形が異なる。

(56) a. 田中さんがパーティーに行かなかった？ (動詞：否定疑問文)

- b. 田中さんがパーティーに行ったんじゃない? (動詞: のではないか)
- (57) a. その本、面白くない? (イ形容詞: 否定疑問文)
- b. その本、面白いんじゃない? (イ形容詞: のではないか)

ナ形容詞と名詞+だ、では否定疑問文と「のではないか」が同じ形になることもある。例えば、(58)は否定疑問文とも「のではないか」とも解釈できる。なお、() の中のよに言えば「のではないか」であることがはっきりする。

(58) 田中さんは親切ではないですか。↑ (親切なのではないですか)

◆否定疑問文には2つのタイプがある。

第一は、一般の疑問と同じく、「～」か「～ない」かを尋ねるものである。例えば、(59) Aははさみがあるかないかを尋ねている。

- (59) A: はさみ、ない?
- B: うん、ないよ。／ううん、あるよ。

このタイプに対する答は「はい、～ない」「いいえ、～」になる。

第二は、「～」という話し手の見込みを表すために使われるものである。例えば、(60) Aは「外は寒い」という見込みを持っていることがこの文からわかる。この場合、「はい」と答えることは相手の見込みが正しいということなので、答え方は「はい、～」となる。同様に「いいえ、～ない」となる。否定疑問文は通常、この第二の用法で使われる。

- (60) A: 外、寒くない?
- B: うん、寒いよ。／ううん、寒くないよ。

◆否定疑問文も「のではないか」と同じく、自分の考えを直接的に述べない表現なので、控えめに自分の主張を述べたり、相手の発言を訂正したりするのに使われる。

- (61) (相手が持っている本について) その本、面白くない?
- (62) 山田: 田中さん、この答、間違ってませんか。
- 田中: ほんとだ。どうもありがとう。

◆否定疑問文「～ない?」の「～」の部分が否定形になることがある。この場合は二重否定になるが、この場合の話し手の見込みは「～ない」である。例えば、(63)の話し手はこのランチがおいしくないという見込みを持っている。なお、こうした表現は普通、形容詞に限られ、動詞や名詞+だ、ではあまり使われない。

- (63) このランチおいしくくない? (「おいしくない」と思っている)
- (64) 先週の試験、あんまり難しくくなかった? (「難しくなかった」と思っている)

◆否定疑問文と「のではないか」はよく似ているが、次のような場合には違いがある。

まず、「のではないか」は「のだろう」などと同じように、状況からの判断を表すため、自分が直接知っていることについては使いにくい。例えば、(65)のように、聞き手に本をすすめる場合、話し手が本を読んでいるのは明らかなので「のではないか」は使いにくい。

(65) (相手が持っている本について)

a. ○その本、面白くない？

b. ?その本、面白いんじゃない？

逆に、否定疑問文は聞き手が答えられる内容について述べたものでなければならない。
例えば、(66)の文脈ではAにはバスが来るかどうかは答えられないので、否定疑問文は使いにくくなる。

(66) A : バス、まだかな。

B : そろそろ {○来るんじゃない／? 来ない} ?

【まとめの問題】

1. () に入れるのに適当なことばを□から選んで書いてください。
- (1) もしもし、ハンカチが落ちました ()。
- (2) A: すいません、こちらは田中さんのお宅^{たく}です ()。
B: いいえ、ちがいます。
- (3) 山田: 田中さん、頭が痛そうです ()。大丈夫ですか。
田中: 大丈夫です。ありがとうございます。
- (4) A: 彼は「この本は面白くない」って言ったけど、面白い ()。
B: おもしろい ()。
- (5) 客: 新大阪まで1枚ください。
駅員: 新大阪です ()。
客: すみません、京都までどれぐらいかかりますか。
駅員: あれ、お客さん、新大阪までです ()。
- (6) 学生: 先生、この本、この部分にミスプリントがある ()。
先生: 本当だ。どうもありがとう。
- (7) A: あれっ、部屋の鍵^{かぎ}がない。僕、さっき、ここに置いた ()。
B: そうね。どうしたのかしら。
- (8) A: 明日、ハイキングに行こうと思ってるんだ。
B: でも、天気予報によると明日は雨だ ()。
- (9) 大学の近くに公園があった ()。あの公園の前に新しいマンションが建ったのよ。
- (10) 日本の景気はしばらくの間よくなる () と思う。
- (11) (田中さんが絵をかいているのを見ながら)
山田: 田中さんは絵が上手です ()。
田中: ありがとうございます。でもそんな上手じゃありませんよ。
- (12) 田中: ジョンさん、ヨーロッパで日本語を勉強する人は少ない ()。
どうして日本語を勉強しようと思ったんですか。
ジョン: そんなに少なくないと思いますけど、私は日本の会社で働きたいと思って日本語を勉強しているんです。
- (13) 彼、昨日は風邪だって言ってたけど、今日のパーティーに来る ()。

ね よ よね ではないか のではないか だろう ↑ だろうか

2. 次の文の（ ）に「の」または「ん」を入れてください。どちらも入れない方がいいときは×を書いてください。

(14) A：ブルーチーズっていうくさいチーズがある（ ） じゃないですか。僕、あれ大好きなんですよ。

B：そうですか。僕は全然だめですね。

(15) 山田：田中さん、顔が赤いけど、もしかして、熱がある（ ） じゃないですか。早く帰った方がいいですよ。

田中：ありがとうございます。じゃ、今日はお先に失礼します。

(16) 山田：田中さん、顔が赤いですよ。（田中さんの額に手を当てる）
やっぱり、熱がある（ ） じゃないですか。帰って寝てください。

田中：ありがとうございます。じゃ、今日はお先に失礼します。

(17) A：すみません。この計算、違っている（ ） ではないでしょうか。

B：本当だ。失礼しました。

(18) A：最近、太ってきたからダイエットしなくちゃ。

B：全然太ってない（ ） じゃないですか。

3. 適当な答を____に書いてください。

(19) A：ここの答、間違っていない？

B：うん、_____よ。

(20) A：この前いっしょに食事した店にもう一度行かない？

B：いいけど、あの店、ちょっと高くない？

A：うん、_____ね。でも、おいしくない？

B：うん、_____ね。じゃ、行こう。

(21) A：新しい髪型にしたんだけど、変じゃない？

B：ううん、_____よ。

4. 適当な方に○をつけてください。

(22) A：納豆、初めて食べたんだけど、おいしい（ a. でしょ b. じゃないですか ）。

B：おいしい（ a. でしょ b. じゃないですか ）。

(23) A：彼の論文、どう思いますか。

B：（ a. よく書けていませんか b. よく書けているのではありませんか ）

(24) A：おかしいな。千円多い。さっき、林さんから千円もらった（ a. ね b. よね ）。

それを足すと合計が合わなくなるんだ。

B：変だね。なぜだろう。

§ 6 のだ、からだ（ためだ）、わけだ、否定に関する表現

<はじめに>

A. 適当な方に○をつけてください。両方とも適当なときは両方に○をつけてください。

(1) 山田：田中さんはビデオを買いましたか。

田中：はい、(a. 買いました b. そうです)。

いいえ、(a. 買いませんでした b. ちがいます)。

(2) 山田：田中さんは新宿でビデオを買ったんですか。

田中：はい、(a. 買いました b. そうです)。

いいえ、(a. 買いませんでした b. ちがいます)。

(3) 山田：林さんは熱があったから大学を (a. 休みましたか b. 休んだんですか)。

(4) 私はパリでこのかばんを (a. 買いませんでした b. 買ったのではありません)。

(5) この糸を切りたいんですが、はさみ (a. ありますか b. あるんですか)。

(6) 失礼ですが、山田さん (a. ですか b. なんですか)。

B. < >の語を「のだ、わけだ」を使った適当な形に変えて () に入れてください。

(7) どうして学校を () か。<休みました>

(8) 山田：田中さんもパーティーに行くでしょ。

田中：その日はちょっと。

山田：行きたくないの？

田中：() けど、今週は忙しいんだ。<行きたくない>

(9) このビデオは秋葉原で () 。新宿で買ったんです。<買った>

(10) ちょっと熱があるけど、テストがあるから () な。<休む>

(11) A：田中さんが「もうお酒は飲まない」って言ってたよ。

B：あんなお酒が好きな人がそんなことを () よ。<できる>

C. 次の各文の下線部は意味的に () のどちらにより近いですか。適当な方に○をつけてください。

(12) この本は面白いわけじゃない。(a. 面白い b. 面白くない)

(13) 私は寿司が食べたくないわけじゃない。(a. 食べたい b. 食べたくない)

(14) このテストは難しくないわけではない。(a. 難しい b. 難しくない)

(15) A：今日は暑いですね。

B：暑くないわけじゃないけど、冷房はいらないよ。(a. 暑い b. 暑くない)

のだ

<疑問文・否定文の場合>

- ・田中さんは新宿でパソコンを買ったんですか。
cf. 田中さんはパソコンを買いましたか。
- ・彼がお金持ちだから結婚したんじゃない。
cf. 私は彼と結婚しなかった。

◆「のだ」は話しことばでも書きことばでも非常によく使われる形である。「のだ」の用法は疑問文、否定文の場合と一般の文（平叙文）の場合に分けて考えるとわかりやすい。ここではまず疑問文、否定文の場合を考える。

<疑問文の場合>

◆「のだ」は疑問文でもよく使われる。「のだ」のつかない疑問文（普通の疑問文）はその文が正しいかどうかをたずねるために使われる。「のだ」のついた疑問文（「のだ」疑問文）はその文が正しいことは認めてさらに詳しい説明を求めるときに使われる。

- (1) 山田さんはパソコンを買いましたか。
- (2) 山田さんは新宿でパソコンを買ったんですか。

例えば、(1)は「パソコンを買ったかどうか」をたずねるために使われるのに対し、(2)はパソコンを買ったことは正しいと認めて買った場所が「新宿」かどうかをたずねるために使われる。言い換えると、(2)には話し手が知っている部分と知らない部分がある。

- (2)′ 話し手が知っている部分：山田さんがパソコンを買ったこと
話し手が知らない部分：買った場所が新宿かどうか

こうした場合の「知っている部分」のことをその文の**前提**、「知らない部分」のことをその文の**焦点**と言う。このように、「のだ」疑問文には前提と焦点がある。

◆普通の疑問文と「のだ」疑問文では答え方が異なる。

- (1) 田中：山田さんはパソコンを買いましたか。（普通の疑問文）
山田：はい、買いました。
いいえ、買いませんでした。
- (2) 田中：山田さんは新宿でパソコンを買ったんですか。（「のだ」疑問文）
山田：はい、{？買いました／○そうです}。
いいえ、{？買いませんでした／○ちがいます}。渋谷で買ったんです。

まず、普通の疑問文はその文で述べられている内容が正しいかどうかを尋ねるために使われるため、答では（「買いました」「買いませんでした」のように）述語を繰り返す。

一方、「のだ」疑問文では普通、述語の部分が正しいことを話し手は既に知っているの、(2)のように「買いました」「買いませんでした」と答えるのは不自然になる。つま

り、(2)の田中さんは山田さんがパソコンを買ったことを既に知っているのだから、「買いました」と言ってもあまり意味がないし、「買いませんでした」と言うとは前提と矛盾してしまうのである。この場合、特に「いいえ」で答える場合は焦点（(2)では「新宿」）の部分の正しい答（(2)では「渋谷」）をそのあとで述べるのが普通である。

◆場所、時間、理由、方法など、文の意味をこまかく説明することばが文に入っている場合は普通、「のだ」疑問文を使う。特に、理由の場合は必ず「のだ」疑問文を使う。

- (3) 彼はアメリカで経済学を {○勉強したんですか／？勉強しましたか}。(場所)
- (4) この店は9時から {○営業しているんですか／？営業していますか}。(時間)
- (5) かぜをひいたから学校を {○休んだんですか／×休みましたか}。(理由)
- (6) 今日は歩いて {○来たんですか／？来ましたか}。(方法)

疑問詞が含まれる場合も普通「のだ」疑問文を使う。

- (7) だれがこのコップを {○割ったんですか／？割りましたか}。
- (8) この作家はどんな本を {○書いてるんですか／？書いていますか}。
- (9) どうしてパーティーに {○来なかったのですか／×来ませんでしたか}。

この他の場合でも文の中の要素を他のものと対比させたい場合は「のだ」疑問文を使う。この場合、対比させたい要素は強く発音される。

- (10) 山田さんはパソコンを {○買ったんですか／？買いましたか}。

(10)は「F a xではなくパソコン」を買ったのかといった文脈で使われる。

- (11) 山田：パソコンを買ったよ。

田中：えっ、パソコンを買ったんですか。F a xを買うって言ってたのに。

山田：そうなんだけど、電気屋によさそうなのがあったから買ったんだ。

述語を対比させることも可能である。例えば、(12)は(13)のような文脈で使われる。この場合、述語は強く発音される。

- (12) 田中さんはこのパソコンを買ったんですか。
- (13) 山田：田中さん、いいパソコンですね。買ったんですか。いつもお金がないって言うてるのにすごいですね。
- 田中：バイトで貯めたんだよ。

◆ただし、述語が形容詞や「名詞＋だ」の場合は普通「のだ」を使わない。

- (14) このスープはおいしい {○ですか／？んですか}。(形容詞)
- (15) 彼は大学院生 {○ですか／？なんですか}。(名詞＋だ)

このような場合に「のだ」を使うとあとで見る、理由をたずねる「のだ」になる。例えば、(14)で普通の疑問文を使った場合はスープがおいしいかどうかをたずねることになるが、「のだ」疑問文を使うと「おいしくなさそうに見えるけどおいしいのか」というようなニュアンスが生まれるので、相手に失礼になる可能性がある。

<否定文の場合>

◆否定文の場合にも「のだ」はよく使われる。この場合も、「のだ」は疑問文の場合と同様に、その文全体を否定するのではなく、その一部を否定するのに使われる。

(16) 私はかばんを買わなかった。(普通の否定文)

(17) 私はかばんを買ったのではない (買ったんじゃない)。 (「のだ」否定文)

(16)は「かばんを買った」ということを否定するだけだが(17)は「(何かを)買った」ことは認めるがそれは「かばん」ではないということを言いたいときに使われる。

「のだ」否定文のあとには否定されたものと対比されるものがつづくのが普通である。

(17)' 私はかばんを買ったんじゃない。くつを買ったんだ。

例えば、(17)だけで終わってしまうと、「かばん」以外の何を買ったのかが聞き手にはわからないままになるので、それを明らかにするために次の文が必要となるのである。

◆疑問文の場合と同様に、時間、場所、理由など文の意味をこまかく説明するものがある場合には普通「のだ」否定文を使う。

(18) 私はパリでかばんを {○買ったんじゃない／？買わなかった}。

(19) 彼女は去年中国へ {○行ったんじゃない／？行かなかった}。

(20) 彼はなぜをひいたから学校を {○休んだんじゃない／×休まなかった}。

この場合、次のような否定が使えることがあるが意味は「のだ」否定文と少し異なる。

(18)' 私はパリではかばんを買わなかった。

(19)' 彼女は去年は中国へ行かなかった。

例えば、(18)' はパリ以外の場所では全てかばんを買ったがパリでは買わなかったという場合に使われる。

疑問文と同様に、述語が形容詞や「名詞＋だ」のときは普通「のだ」否定文を使わない。

(21) 田中さんは背が {○高くない／？高いんじゃない}。(形容詞)

(22) ヤンさんは中国人 {○じゃない／？なんじゃない}。(名詞＋だ)

＜一般の文の場合＞

- ・昨日は大学を休んだ。熱があったのだ。
- ・（屋根から音が聞こえるのを聞いて）あっ、雨が降ってるんだ。
- ・彼は16歳から18歳までアメリカで過ごした。アメリカの高校で勉強したのだ。
- ・（失業率に関する新聞記事の見出しを見て）また失業率が上がったんだ。
- ・来週、彼女と食事をするんだった。
- ・こんなに試験が難しいと知っていたら、もっと勉強しておくんだった。
- ・先生、ちょっとご相談があるんですが。
- ・A：元気ないね。どうしたの？
B：実は心配なことがあるんだ。

◆一般の文で使われる「のだ」は前の文や状況との関連づけを表す。

理由、解釈を表す場合

◆「のだ」には前の文の内容の理由や、状況に対する話し手の解釈を表す用法がある。

(23) 昨日は学校を休んだ。頭が痛かったんだ。

(24) 昨日は家に帰るのに3時間もかかった。事故で電車が止まってしまったのだ。

(25) (デパートで泣いている子どもを見て) あの子迷子になったんだ。

(26) (部屋の電気が消えているのを見て) 彼は出かけてるんだ。

例えば、(23)は「昨日学校を休んだ」ことの理由が「頭が痛かった」ということであると言いたいときに使われる。また、(25)はデパートで子どもが泣いているという状況に対する解釈として、「迷子になった」ということを考えたということを表す。

状況に対する解釈の場合、解釈に対する話し手の考え方に応じて、「のだ」のあとに「だろう、かもしれない、にちがいない」をつけることもできる。

(25)' あの子は迷子になったのだろう。

(26)' 彼は出かけているのかもしれない。

「だろう、かもしれない、にちがいない」以外の語はつけられない。

(25)" ×あの子は迷子になったのようだ。(cf. ○あの子は迷子になったようだ。)

(26)" ×彼は出かけているのはずだ。(cf. ○彼は出かけているはずだ。)

言い換えの場合

「のだ」の中には前の文の内容を言い換えるものもある。これは話し手が聞き手にわかりやすいように配慮して使うもので、「つまり、すなわち」などのことばと共に使われることも多い。書きことばの「のだ」の用法のうち最も多いのがこの用法である。

(27) 今日大学を卒業した。つまり、明日からは学生ではないのだ。

(28) 漢字は6世紀に中国から伝わった。それまで日本には文字がなかったのである。

例えば、(27)は「今日大学を卒業した」ということは「明日からは学生ではない」ということだという形で述べている。このタイプの「のだ」(「つまり、すなわち、要するに」なども含めて)は文章を読むときに注意する必要がある。

- (29) 私の住む神奈川県には、『神奈川新聞』という最有力の地元新聞があります。この新聞が、一九九一年春の入試シーズンに公立高校の合格者名の報道をしませんでした。それまでは毎年のせていた名簿が、その年はのらなかったのです。新聞社には、どうしてのせないのだという問い合わせ電話が、三〇〇本ほどかかったそうです。
(岸本重陳『新聞の読み方』)

この例では「この新聞が、一九九一年春の入試シーズンに公立高校の合格者名の報道をしませんでした」という文の内容を「それまでは毎年のせていた名簿が、その年はのらなかった」という形で言い換えて前の文の意図を読者によりわかりやすくしている。

発見の場合

◆「のだ」の中には話し手による**発見**を表す場合がある。

- (30) (機械の使い方がわかったとき) このボタンを押せばいいんだ。
(31) (掲示板を見て) 明日会議があるんだ。

「のだ」によって表される発見はそれまでわからなかったことに対する「解答」を見つけたといった抽象的な場合に限られる。例えば、(30)はそれまでわからなかった機械の使い方がわかったという場合に使われる。

◆具体的なものを発見した場合には「のだ」は使われない。

- (32) (窓を開けて) あっ、雨が {○降ってる／?降ってるんだ}。
(33) あっ、あそこに財布が {○落ちてる／×落ちてるんだ}。

◆一度忘れていたものを思い出したときには「のだった」を使う。

- (34) 明日会議があるんだった。
(35) 来週、病院に行くんだった。

例えば、(34)は「明日会議がある」ということをそれまでに聞いていたが忘れていて、その時思い出したという場合に使われる。この場合、思い出したものが過去のことがらであれば「のだった」の前が「～した」の形になる。

- (36) 思い出した。先週の金曜日は田中さんといっしょに飲んだんだった。

こうした場合、述語が「ある」の場合はタ形でも同じ意味を表せる。

- (34)' 明日会議があった。

反事実

◆「のだった」には事実と反対の内容を述べる**反事実**の用法がある。反事実の場合、「の

だった」の前の述語は辞書形に限られる。

(37) 試験がこんなに難しいと知っていたら、もっと勉強するんだった。

(?勉強したんだった)

「のだった」は「べきだった」と似た意味だが、主語が1人称に限られる点異なる。

(38) A: この前のパーティー、来ればよかったのに。ごちそうだったよ。

B: ああ残念。行く {べきだった／んだった}。

(39) 田中さんはパーティーに出席する {○べきだった／×んだった}。

前置き

◆聞き手に何かを頼んだり、言いにくいことを言ったりするときに、いきなりその内容を話さずに、他のことを話すことがある。そうした場合に使われる表現を**前置き**と言う。

(40) 先生、お願いがあるんですが、あとで研究室に伺ってもよろしいでしょうか。

(41) 田中さん、申し訳ないんだけど、この前借りたカメラを壊してしまったんだ。

◆「のだ」は(42) Bのように、話し手だけが知っている内容を聞き手に伝えるという場合にも使われる。「理由」の用法も話し手だけが知っている内容を「事実」と「理由」に分けて述べたものと見ることができる。こうした場合、「実は」が使われることが多い。

(42) A: 元気ないね。どうしたの?

B: 実は健康診断の結果がよくなかったんだ。

からだ（ためだ）

- ・昨日は大学を休んだ。熱があったからだ。
- ・私は20年前にこのまちに引っ越してきた。このまちに住もうと思ったのは四季それぞれに咲く花が美しかったからである。
- ・問題 日本不良債権の処理が進まないのどうしてだと考えられるか。
答 デフレによって、担保である土地や株の価値が下がるためである。

◆「からだ」は前の文の理由を表すために使われる。書きことばでは「ためだ」が使われることも多い。

(43) 昨日は学校を休んだ。頭が痛かったからだ。

(44) A：どうしてこんなにたくさん人がいるんですか。

B：バーゲンをやっているからです。

このような場合には「のだ」も使える。

(43)' 昨日は学校を休んだ。頭が痛かったんだ。

(44)' B：バーゲンをやっているんです。

「からだ」は状況の理由を表すことはできない。

(45) (デパートで泣いている子どもを見て) 迷子になった {×からだ／○んだ}。

(46) (部屋の電気が消えているのを見て) 彼は出かけている {×からだ／○んだ}。

◆「からだ」「ためだ」は「～のは…からだ／ためだ」という文型で使われることが多い。この文型で使われる場合は「のだ」は使われない。

(47) ひろし君が引っ越したのはお父さんの転勤が決まったからだ。(×のだ)

試験問題などで「～のはなぜか」という問がある場合があるが、これに対する答では文末に「からだ／ためだ」をつけることが必要である。

(48) 問題 英語が国際語として使われているのはなぜか。

答 構造が {×簡単である／○簡単であるためである}。

わけだ

- ・彼は20歳のときこのまちに引っ越してきて、去年70歳で亡くなるまでずっと住んでいた。彼はこのまちで50年間暮らしたわけだ。
- ・A：来週、田中先生出張らしいよ。
B：ということは、試験は再来週になるわけだ。
- ・A：田中さんは若いころアメリカで暮らしていたそうだよ。
B：道理で英語がうまいわけだ。
- ・この問題は難しいわけではない。ちょっと計算が面倒なだけだ。
- ・漢字が読めるからといって、中国語がわかるというわけではない。
- ・田中さんは優しい人だ。そんなひどいことを言うわけがない。
- ・明日のパーティーは友だちのお祝いだから行かないわけにはいかない。

◆「P。Qわけだ。」はPから考えて（推論して）Qという結論を出したことを表す。

(49) 買い物に行くとき2万円持っていった。帰ってから数えたら3千円しか残って
いなかった。1万7千円も使ったわけだ。

(50) 去年まで、独身の友だちは田中さんと山田さんと大山さんだった。今年、田中
さんと山田さんが結婚した。独身の友だちは大山さんだけになったわけだ。

次のように、相手が言ったことを受けて話す場合「ということは」で始まることが多い。

(51) A：私は漢字をカードに書いて覚えています。毎日10個ずつ覚えています。

B：ということは、もうすぐカードが500枚になるわけですね。

(52) A：洋子さんは山田さんと結婚するそうです。

B：ということは、田中洋子から山田洋子に変わるわけですね。

相手から聞いたことによって、今までわからなかった理由がわかったという場合は「道
理で～わけだ」という言い方が使われる。

(53) A：田中さんはイギリスに3年間留学していたんですよ。

B：道理で英語が上手なわけですね。

(54) A：山田さんは2週間ほど海外旅行に行っているそうですよ。

B：道理でメールの返事が来ないわけだ。

この用法では「はずだ」も使える。

(53)′ B：道理で英語が上手なはずですね。

◆相手の話を聞いて自分が出した結論が正しいかどうかを確かめるための質問では「わけ
ですか」を使う。

(55) A：山田さんは中学から高校までアメリカで生活していたんですよ。

- B : ということは、英語が上手なわけですか。
- (56) A : 田中さんはお金持ちだそうよ。
- B : 家も大きいわけ？

この場合、「～の（ですか）」も使える。

- (56)' B : 家も大きいの？

◆「わけだ」には3種類の否定がある。その内、「わけではない」には2つの用法がある。
「P。Qわけではない」の第一の用法は「 $P \rightarrow Q$ 」という考え方が正しいとは言えない場合に使われる。

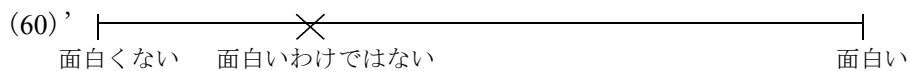
- (57) あのスーパーの品物は安い。しかし、だからといって、おいしくなくてもいいというわけではない。
- (58) 漢字は難しいが、マスターできないわけではない。
- (59) 今週は忙しいけど、デートができないわけじゃない。

例えば、(57)は「(品物が) 安い \rightarrow おいしくなくてもいい」という考え方は正しくないということを述べるために使われている。

「～わけではない」の第二の用法は「～」を部分的に否定するというものである。

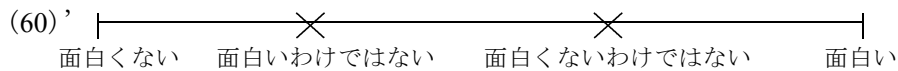
- (60) この本は面白いわけではない。
- (61) 私はりんごが嫌いなわけじゃない。

例えば、(60)は「面白くない」とは言えないが、どちらかというと「面白くない」に近いという判断を表す。



「～わけではない」の「～」の部分に否定形が来ることもある。この場合はどちらかという「～」に近いという判断を表す。

- (62) この本は面白くないわけではない。



◆「～わけがない」は「～」を強く否定するために使われる。この場合の「わけ」は「理由」という元の意味に近い。

- (63) 彼がそんなひどいことを言うわけがない。
- (64) 彼は正直な人です。彼が私たちをだますわけがありません。
- (65) これはとても簡単なテストです。田中さんにできないわけがありません。

例えば、(63)は「彼がそんなひどいことを言う」ことの可能性を強く否定している。
この用法では「はずがない」も使える。

(63) 彼がそんなひどいことを言うはずがない。

◆「～わけに(は) いかない」は、～をすることは(よくないことだから) できない／してはいけない、という意味を表す。

(66) A：日曜日にパーティーに行くんだ。

B：でも、最近、レポートで忙しいって言っていたのに、大丈夫？

A：そうなんだけど、指導教官の出版記念パーティーだから、行かないわけに(は) いかないんだ。

(67) 妻：先に食べてて。

夫：今日は君のお祝いだから、先に食べるわけにはいかないよ。

例えば、(66)は「(パーティーに) 行かない」ことはよくないことだから(忙しくても) 行かなければならない、ということを言っている。

否定に関する表現

- ・雨は降っていない。
- ・あっ、財布がない。
- ・君の考え方は間違ってはいない。
- ・この車は必ずしも安くない。
- ・田中さんは彼にあいさつもしなかった。
- ・この本は面白くなくはない。
- ・彼の気持ちもわからなくはない。
- ・満腹だったが、彼女が作ってくれたものだから食べないわけにはいかなかった。

基本的な否定

◆基本的な否定は述語を否定形にして作られる。

(68) 雨は降っていない。(×雨が) (動詞)

(69) 私はその本を買わなかった。(×私が) (動詞)

(70) このテストは難しくない。(×このテストが) (イ形容詞)

(71) 彼は親切ではない。(×彼が) (ナ形容詞)

(72) 彼女は学生ではない。(×彼女が) (名詞+だ)

◆否定文では(68)～(72)のように、主語に「は」をつけるのが普通である。ただし、何かが「ない」ことに気がついたような場合には「が」を使う。

(73) あっ、財布がない。

(74) あっ、かぎがかかっていない。

◆動詞とイ形容詞の否定文（Vーない、Aーない）では述語に「は」を使わないのが基本で、「は」を使うと対比的な（VやAではないが、それと似ている）意味になる。

(68)' 雨は降ってはいない。

(70)' このテストは難しくはない。

例えば、(68)' は「雨が降っている」ことは否定しているが、それと似ている（「雨が降りそうだ」etc.）という意味を表す。また、(70)' は「難しい」ということは否定しているが、それと似ている（「問題が複雑だ」etc.）という意味を表す。

動詞の否定形に「は」をつける場合の規則は次の通りである。

テ形 ～ている etc. : 「～て」と「いる etc.」の間に「は」を入れる。

(e.x. 飲んでいる→飲んではいる)

辞書形 ～ます+は+しない (e.x. 飲む→飲みはしない)

～ます ～ます+は+しません (e.x. 飲みます→飲みはしません)

タ形 ～ます+は+しなかった (e.x. 飲んだ→飲みはしなかった)

◆ナ形容詞と名詞の否定では「は」を必ず使うが、対比的な意味にならない場合もある。

(71) 彼は親切ではない。

(72) 彼女は学生ではない。

例えば、(71)は「親切だ」ということを否定しているだけの意味の場合にも使える。ただし、次のように対比的にも使える。

(71)' 彼は親切ではないが、頭はいい。

部分的な否定

◆文全体を否定するのではなく、文の一部だけを否定する言い方がある。このうち、ここでは「のではない」「わけではない」以外の表現を扱う。

必ずしも～ではない、～とは限らない

◆「必ずしも～ではない／～とは限らない」は「～」がいつも／完全に正しいとは言えないという意味を表す。例えば、(76)は「お金持ちだから幸せだ」ということがいつも正しいとは言えない、ということを表す。

(75) この車は必ずしも安くはない。

(76) お金持ちだからといって、(必ずしも) 幸せだとは限らない。

強い否定

否定を強調する言い方もある。ここでは「わけがない、はずがない」以外の表現を扱う。

～もしない、～さえしない

- ◆「～もしない、～さえしない」は「～」を強調する言い方である。

(77) 田中さんはその本を {読みもしなかった／読みさえしなかった}。

(78) 彼は山田さんとけんかをしていて、電話を {かけもしない／かけさえしない}。

二重否定

- ◆述語の前に否定形があり一つの文に2回否定がある場合がある。これを**二重否定**と言う。
二重否定は肯定に近いが、それよりもやや否定に近いニュアンスを持つ。

～なくはない、～ないことはない

- ◆「～なくは／もない」「～ないことは／もない」はほぼ同じ意味を表す。
「～」が形容詞のときは「～」に近いがやや否定に近い段階を表す。

(79) この部屋が {静かでなくはない／静かでないことはない}。

(80) この本は {面白くなくはない／面白くないことはない}。

(81) 
面白くない 面白くはない 面白くなくはない 面白い
つまらない

「～」が動詞のときは「～」が不可能ではない、全然「～」をしないというのは正しくないということを表す。例えば、(82)は彼の気持ちを理解することは不可能ではないということを表す。

(82) 彼の気持ちはわからなくもない。

(83) 私はお酒を飲まないこともない。

～ないわけにはいかない

- ◆「～ないわけにはいかない」は「～わけにはいかない」の「～」の部分で否定形の場合で、「～しなければならない、～せざるを得ない」という意味を表す。

(84) 来週試験があるので、勉強しないわけにはいかない。

(85) あまりお腹は空いていなかったが、彼女がせっかく作ってくれたので食べない
わけにはいかなかった。

その他の否定

- ◆その他、次のような表現がある。

言うまでもない

「～は言うまでもない」は「～」は必要ではないという意味を表す。

(86) 日本語を勉強するときに漢字が重要であることは言うまでもない。

(87) 彼の考え方が正しくないことは言うまでもない。

～には及ばない

「～」の行動が必要ではないことを表すには「～には及ばない」という表現を使う。

(88) わざわざ見送りに来ていただくには及びません。

(89) 手紙を書くには及びません。電話をかけてくれれば十分です。

【まとめの問題】

A. a 文と b 文はどう違いますか。

- (1) a. 田中さんは学生ですか。
b. 田中さんは学生なんですか。

違い： _____

- (2) a. 田中さんがお金持ちだから結婚しませんでした。
b. 田中さんがお金持ちだから結婚したではありません。

違い： _____

- (3) a. 田中さんはかばんを買いませんでした。
b. 田中さんはかばんを買ったではありません。

違い： _____

B. _____に適切なことばを書いて文を完成させてください。

- (4) 田中さんは 18 歳の時にこの会社に入って、去年 60 歳で定年になった。

田中さんは _____。

- (5) これは難しい問題だから、 _____わけにはいかない。

- (6) A：吉田さんは 5 歳の時からピアノを練習しているそうですよ。

B：道理で、 _____ね。

- (7) A：田中先生は来週、アメリカに出張するんだって。

B：ということは、 _____ね。

- (8) 漢字は難しいかもしれませんが、

_____わけではありません。

- (9) (先週、田中さんと食事をしたことを思い出したとき)

そうそう、先週、 _____。

- (10) (道路の渋滞に巻き込まれた人のことば)

こんなことなら、 _____。

C. 適当な方に○をつけてください。

- (11) この問題は難しい (んじゃない わけじゃない) けど、ちょっとひねってある。

- (12) 田中さんはこのかばんをパリで買った (んじゃない わけじゃない)。

§ 7 「は」と「が」、無助詞

<はじめに>

A. 次の各文の（ ）に「は、が、を」のどれかを入れてください。どれも入れる必要がない場合は「×」を入れてください。

- (1) a. 田中さん（ ）学生である。
b. 田中さん（ ）学生であることは事実だ。
- (2) a. 『坊っちゃん』（ ）夏目漱石が書いた。
b. 『坊っちゃん』（ ）夏目漱石が書いたことは事実だ。
- (3) 田中さんに（ ）山田さんが本を送ったことは事実だ。
- (4) a. 私（ ）去年北京に行った。
b. 私（ ）去年北京に行ったとき、田中さんも北京に来ていた。
- (5) a. 田中さん（ ）この論文を20歳の時に書いた。
b. 田中さん（ ）20歳の時に書いた論文はこれだ。
- (6) 先月、田中さんに男の子（ ）生まれた。
- (7) さっき、知らない人（ ）私のところに来た。
- (8) a. 机の上に本（ ）ある。
b. 本（ ）机の上にある。
- (9) a. 公園で子ども（ ）遊んでいる。
b. 子ども（ ）公園で遊んでいる。
- (10) むかしむかし、あるところに、おじいさん（ ）住んでいました。ある日、おじいさん（ ）山へ芝刈りに行きました。
- (11) 田中さん（ ）パソコン（ ）買ったの（ ）どこですか。
- (12) 吉田さん（ ）いたら、パーティー（ ）もっと楽しいだろうと思います。
- (13) あっ、雨（ ）降っている。
- (14) 今、雨（ ）降っていない。
- (15) この店（ ）水曜日（ ）休みです。
- (16) この時計（ ）山田さん（ ）私にくれたものです。
- (17) ヤンさん（ ）国へ帰る前に、送別会（farewell party）をしましょう。
- (18) ヤンさん（ ）国へ帰る前に、私の家に来た。
- (19) A：さっき、ここにいた人（ ）だれですか。
B：友だちの田中さんです。
- (20) a. 田中さん（ ）この論文を20歳の時に書いた。
b. 田中さん（ ）20歳の時に書いた論文はこれだ。
- (21) 田中さん（ ）私（ ）医者であることを知りませんでした。

「は」と「が」

<「は」と「が」の基本的な違い>

- ・田中さん**は**大学生である。(有題文)
- ・田中さん**が**大学生であることは事実である。
- ・あつ、雨**が**降っている。(無題文)

◆「は」も「が」も主語を表すが、「は」は文の主語で「が」は節 (clause) の主語である。

(1) 田中さん**は**学生である。

主語 述語

(2) 田中さんが学生である **こと** は 事実である。

主語 述語

例えば、(1)の文の主語は「田中さん」なので「は」がつくが、(2)の文の主語は「田中さんが学生であること」なので「田中さんが学生であること」には「は」がつく。一方、「田中さん」は「田中さん__学生であること」という節の主語なので「が」がつく。このような文の主語のうち、「は」で表されるものを**主題**、主題を持つ文を有題文と言う。

◆主題は「その文で述べたい内容を聞き手に知らせる」働きを持っている。例えば、(1)の文は「田中さん」について述べるものであり、(2)は「田中さんが学生であること」について述べるものである。

多くの文には主題があるが、(3)のように知覚した内容をそのまま述べる文や(4)のように出来事を報告する文では(文の主語を表すために)「は」でなく「が」が使われる。こうした文には主題はない。

(3) (朝起きてカーテンを開けた瞬間) あつ、雨**が**降っている。(×は)

(4) 隣の部屋にこんなもの**が**落ちていました。(×は)

<「が」が使われる場合>

- ・山田さん**が**書いた本は面白そうだ。(×は)
- ・明日雨**が**降ったら、ハイキングは中止です。(×は)
- ・さっき、ドア**が**開いたみたいだ。(？は)
- ・刑事：だれ**が**最後にこの部屋の鍵をかけたんですか。(×だれは)
田中：山田さん**が**かけたんです。(×田中さんは)
- ・彼は病気になったことがなかった。その彼**が**急病で死んでしまった。(？は)

◆最初に主語が「が」で表される場合を考える。主語が「が」で表されるのは次のような場合である。

従属節や名詞修飾節の中の場合

◆「が」は節の主語を表す（「は」は節の主語を表せない）ので、従属節や名詞修飾節の中では「が」が使われる。

- (5) 田中さん^が来たとき、山田さんはもう出かけていたそうだ。(×は)

従属節

主節

- (6) [私が渋谷で買った] パソコンはこれです。(×は)

名詞修飾節

初めてその情報について述べる場合

◆ある情報について初めて述べる場合には「が」が使われることが多い。

- (7) あれっ、鍵^がかかっている。(×は)

- (8) 田中さん^が女の人と話してたよ。(？は)

- (9) いただいたばかりの「寂庵だより」に、瀬戸内寂聴さんの随想「脳死移植について」^が載っている。

「私は元来、脳死をひとの死とは認めないという少数派の立場をとってきたので、臓器移植ということには否定的であった。自分は決して人の臓器をいただかないし、自分のものも提供しない、という考えだった」。今度の移植で考えは変わらないかと問われても、瀬戸内さんは「変わらない」と答えた。

(毎日新聞朝刊 1999.3.17「余録」)

初めて述べる情報に「が」がつくのは、(7)のように何かを発見した場合、(8)のように他の人に何かを報告する場合、(9)のように文章や会話の初めの場合などである。

主語が文の中心的意味（焦点）である場合

◆主語に「が」がつくもう一つの場合は主語が文の中で中心的な意味である場合である。例えば、(10) Aは「だれかがこのコップを割った」ということを知っているが割った人は知らない。この場合、意味的に最も重要なのは「だれ」の部分であるので「が」が使われる。この場合の「だれかがこのコップを割った」の部分を(10) Aの前提、「だれ」の部分を焦点と言う。(10) Bの「田中さん」も(10) Bの焦点なので「が」がつく。

- (10) A：だれ^がこのコップを割ったんですか。

B：田中さん^が割ったんです。

文章の中でも主語が焦点になることがある。例えば、(11)a と(11)b を比べると、2文の間で「彼」の性質が「病気をしたことがなかった」と「急病で死んでしまった」いうふうに対比的、逆接的になっている。言い換えると、(11)b の「彼」は前の文の「彼」とは異なる性質を持っていることになるため、この文の焦点になると考えられ、そのため「が」がつくのである。こうした場合、主語は「その～が」の形で表されるのが普通である。

- (11) (a) 彼は病気をしたことがなかった。(b) その彼^が急病で死んでしまった。

<「は」が使われる場合①>

- ・田中さんはパーティーに来たが、山田さんは来なかった。(？が)
- ・私は去年中国へ行った。(？が)
- ・田中さんは親切だ。(「が」は特別の意味)
- ・今、雨は降っていない。(？が)
- ・小泉首相は昨夜飛行機でアメリカに向かった。(〇が))
- ・パーティー会場で林さんに会った。林さんは元気に食事をしていた。(？が)
- ・この本は田中さんが書いた。(×が)

◆上で見た場合以外は「は」が使われる。具体的には次のような場合である。

「～が、～けど」の節の中の場合

◆従属節の中では「が」を使うのが普通だが、「～が、～けど」の節の中では「は」を使うのが普通である。これはこれらの節が「対比」を表すためである。

(12) 田中さんはヨーロッパへ行ったが、吉田さんは中国へ行った。

主語が1人称(「私(たち)」)、2人称(「あなた(たち)」)の場合

◆「は」がつくものは聞き手がすぐにわかるものでなければならない。

(13) さっき、変な男の人 {×は／〇が} 来たよ。

1人称は話し手、2人称は聞き手であり、どちらも聞き手にとってはすぐわかるものであるので、普通「は」がつく(日本語では「あなた(に当たる語)」の代わりに(15)の「田中さん」のように相手の名前や役職名などを使う方が普通だが、これも2人称である)。

(14) 私は去年中国へ行った。

(15) 山田：田中さんは去年中国へ行きましたか。

田中：はい、行きました。

述語が形容詞、名詞+だ、の場合

◆「は」は最も典型的には主語の属性を述べる文で使われる。したがって、述語が形容詞や名詞+だ、の場合は普通「は」がつく。

(16) この酒はうまい。

◆この場合、普通は「は」が使われるが、「他にもない～が」「～だけが」という意味の場合には「が」が使われる。例えば、(16)は「この酒」の属性(性質)を述べているが、(17)は「他の酒ではなくこの酒がうまい」「この酒だけがうまい」という意味を表す。こうした場合「AがB」を「B(の)はA」と言うこともできる。

(17) この酒がうまい。(＝うまいのはこの酒です。)

(18)a. 私は 田中です。

知っている 知らない

b. 私が 田中です。(＝田中は私です。)

知らない 知っている

(18)a は一般的な自己紹介の場面で使われる（ただし、こうした場合には「私は」を省略の方が自然である）。この場合、「私」は聞き手にとってわかっているものであり、「私」の属性（名前、職業など）が必要な情報であるため、「私」に「は」がつく。

一方、(18)b は次のような場面で使われる。ある会議の会場にいる田中さんに、至急連絡したいという電話がかかってきたとする。さらに、電話の内容を田中さんに伝える人（鈴木さん）は田中さんを知らないとする。この場合、鈴木さんにとって、「田中」という人が会場にいることはわかっているが、それがだれかがわからない。したがって、「私」はこの場合聞き手（鈴木さん）にとってわからないものであるため「が」がつく。なお、この場合、主語と述語を入れ換えて「田中は私です。」と言っても同じ意味になる。

否定文の場合

◆否定形は肯定形（affirmative form）よりも状態的な表現なので、普通「は」が使われる。

(19) 今、雨は降っていない。(？が)

cf. (20) 今、雨が降っている。(×は)

ただし、「～ない」ことを発見したという場合は「が」が使われる。

(21) あっ、鍵がかかっていない。(×は)

(22) あれっ、財布がない。(×は)

主語がよく知られている人やものの場合

◆「は」は聞き手（書きことばの場合は読み手）がすぐにわかると話し手（書き手）が考えるものにつく。したがって、知名度が高い人やものには「は」がつきやすい。

(23) 小泉首相は 19 日、アルメニアのコチャリャン大統領と首相官邸で会談し、共同声明を発表した。(朝日新聞朝刊 2001.12.28)

(24) モーツァルトは 3 歳のとき、独りでピアノをたたいて遊び、5 歳でメヌエットを作曲した。音楽家には神童が多い。12 日に亡くなったユーディ・メニューインさんも神童系だった。(毎日新聞朝刊「余録」1999.3.14)

文章・会話の中の場合

◆文章や会話の中で一度言及された要素を繰り返す場合は原則的にその要素に「は」がつく。これは繰り返されることでその要素が聞き手にとってわかるようになるためである。

(25) むかしむかしあるところに一人のおじいさんが住んでいました。ある日、おじいさんは魚を釣るために川に出かけました。(？が)

(26) 先週パーティーで元気そうな彼を見かけた。彼は陽気にしゃべっていた。(×が)

ただし、文と文の関係が対比的、逆接的なものの場合は「が」になる。

(27) 先週パーティーで元気そうな彼を見かけた。その彼が昨日亡くなった。(？は)

<「は」が主語ではない場合>

◆「は」は普通、主語を表すが、主語を表さない場合もある。それは次のような場合だが、こうした場合の「は」は「が」に置き換えられない。

「～を」の代わりをする場合

◆「～は」は「～を」を主題として述べるのに使われることがある。

(28) この本は田中さんが書いた。

(29) 田中さんがこの本を書いた (こと)

- a. この本を田中さんが書いた。 (「この本」を文頭に移動)
- b. この本をは田中さんが書いた。(「は」をつける)
- c. この本は田中さんが書いた。 (= (28))

例えば、(28)は(29)という内容を「この本」を主題として述べたものである。具体的には、まず、主題としたい要素(「この本を」)を文頭に移動させる(主題はその文で述べたい内容を聞き手に知らせるためのものなので文頭になければならない)。次に、移動させた要素に主題を表す「は」をつける。最後に、「をは」という連続は許されないので「を」を消去すると(28)の文ができる。

その他の場合

◆「～を」の場合と同じように、「～に」「～から」なども主題とすることができる。

(30) 田中さんには山田さんがその本を渡した。

(31) 田中さんから手紙が来た。

「～を」の場合との違いは「には」「からは」がそのまま使われる(「に」や「から」を消去しない)ということである。

<「は」が使われる場合②>

- ・私はリンゴは好きです。(cf. 私はリンゴが好きです。)
- ・田中さんはパリに行きましたが、吉田さんは北京に行きました。
- ・A：今度のパーティー、だれが来るかな。
B：田中さんと山田さんは来るよ。(cf. 田中さんと山田さんが来るよ。)
- ・この本は面白くはない。(cf. この本は面白くない。)

◆「は」には主題を表す用法の他に对比を表す用法もある。文脈上必ず对比になるのは次の場合である。

1文の中に2つ以上「は」がある場合

◆「は」は基本的には主題を表すが、主題は1文に1つに限られる。したがって、1文に2つ以上「は」が現れると2つ目以降の「は」は对比となるのが普通である。

(32) a. 私はリンゴが好きです。

b. 私はリンゴは好きです。

例えば、(32)a は「リンゴ」以外のものについて特に何も問題としない（他に好きなものがあるともないとも言わない）解釈が可能だが、(32)b は「リンゴ」以外に好きなものはないというニュアンスが強い。

「～が、～けど」の節の中の場合

◆この場合は文型が对比的なので「は」が使われる。

「～は」を強調した場合

◆「～は」の部分の強調して発音すると、「他のことは知らないが、少なくとも～は」という对比的な意味が強くなる。例えば、(33) Bは「田中さん以外の人があるかどうか走らないが、少なくとも田中さんは来る」という意味を表す。

(33) A：今度のパーティーにだれが来るかな。

B：田中さんは来るよ。

述語に「は」が含まれるとき

◆「行きはした（cf. 行った）、面白くはない（cf. 面白くない）、飲んではいる（cf. 飲んでいる）」のように、述語の中に「は」が含まれるときその「は」は普通、对比になる。

(34) 映画館に行きはした。しかし映画は見ずに帰ってきた。

(35) この本は面白くはないが、役に立つ。

このタイプの表現のあとには逆接の表現が続くのが普通である。

無助詞

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・田中さん<u>が</u>パーティーに来るかな？（？は／？が）・私<u>が</u>今度の出張<u>に</u>行きます。・山田さん<u>が</u>この本<u>を</u>読んだ？ |
|---|

◆話しことばでは「は」も「が」もつかない形が使われることがある（ここでは無助詞をがで表す）。このような言い方を**無助詞**と言う。書きことばでは無助詞は使われない。

◆無助詞のうち、文頭のものは「は」や「が」の代わりの働きをしている。つまり、「は」を使うと対比的なニュアンスが出て、「が」を使うと「～だけが」というニュアンスが出る場合にその両方を避けるために無助詞が使われるのである。

(36) (ブティックで) 私_はこの服_を買う。

例えば、(36)で「は」を使うと「あなたは買わないかもしれないけど」といった対比のニュアンスが出る。また、「が」を使うと「他の人ではなく私が買う」という強調のニュアンスが出る。そのどちらも避けたい場合は無助詞を使う。

◆文頭以外の無助詞は格助詞の省略と考えてよい。省略できる格助詞は「が、を、に（方向）、へ」であり、「に（人）、で、から、まで、と」は省略できない。

(37) 今度中国 { _へ / に } 行くんだよ。 (に：方向)

(38) この本は田中さん { × _へ / ○ に } もらったんだ。(に：人)

【まとめの問題】

A. { } 中のことばを全部使って正しい文を作ってください。ただし、1つだけいら
ないことばが入っています。

例. { 田中さん 知らない人 は に なぐった なぐられた }

→ 田中さんは知らない人になぐられた。

(1) { 田中さん 本 です が は を 書いた これ }

→ _____

(2) 山田：田中さんが食事をしたレストランはどこですか。

田中：{ あの店 を した の 私 食事 が は です は }

→ _____

(3) { 田中さん が です お医者さん が は お兄さん }

→ _____

(4) A：私が出かけているあいだに、何かありましたか。

B：{ 来ました が 田中さん は }

→ _____

(5) A：この本をどうしましょうか。

B：{ この本 もらいます が を は 私 }

→ _____

B. 次の各文の a と b はどう違いますか。

(6) a. 田中さんは部屋に入ると、電気をつけた。

b. 田中さんが部屋に入ると、電気をつけた。

違い： _____

(7) a. 洋子さんはきれいだ。

b. 洋子さんがきれいだ。

違い： _____

(8) a. この本は面白くない。

b. この本は面白くはない。

違い： _____

§ 8 指示詞（文脈指示）

<はじめに>

A. 適当な方に○をつけてください。両方使える場合は両方につけてください。

- (1) A : 先月行ったレストランがあるだろ。(a. あの店 b. その店) にまた行かないか。
B : (a. あの店 b. その店) はおいしかったから、行ってもいいよ。
- (2) A : 友達に田中って男がいるんですけど、(a. あいつ b. そいつ) 面白いんですよ。
B : (a. あの方 b. その方)、どんな仕事をされてるんですか。
- (3) A : 先月彼とレストランに行ったんだけど、(a. あの店 b. その店) に行かないか。
B : (a. あの店 b. その店)、どこにあるの？
- (4) 将来子どもができれば、(a. あの子 b. その子) に佳子って名前をつけよう。
- (5) A : 昨日、この間紹介してくれたレストランに行って来たよ。
B : ああそう。(a. あの店 b. その店)、いいだろ。
A : うん。(a. あの店 b. その店) の庭も最高だった。また行くことにするよ。
- (6) A : 友達に田中って男がいるんだけど、(a. あいつ b. そいつ) 面白いんだ。
B : (a. あの人 b. その人)、ひげを生やした背が高い人じゃない？
A : そうだけど、知ってるの？
B : (a. あの人 b. その人)、私の友達のご主人なの。

B. 適当な方に○をつけてください。両方使える場合は両方につけてください。

- (7) 日本経済は (a. この 10 年間 b. その 10 年間) ずっと悪い状態にある。
- (8) 田中さんは林さんが悪いと言う。私も (a. こう b. そう) 思う。
- (9) 田中さんは 8 時ごろ帰った。今、家にいないとすると、(a. これから b. それから) 出かけたのだろう。
- (10) A : 来週の田中先生の授業はあるかなあ？
B : (a. 彼 b. 田中先生) は学会に出張だから、授業は休みだよ。
- (11) 私はサザンオールスターズのファンだ。(a. このバンド b. そのバンド) の歌を聞くと心が落ち着く。
- (12) 林君はずっと「結婚なんかしない」と言っていた。(a. この林君 b. その林君) が洋子さんと会ってから 1 週間で結婚を決めてしまった。
- (13) 私が自分の子供に望むこと、(a. これ b. それ) は健康でいてくれることだけだ。
- (14) 山田 : ご紹介します。(a. こちら b. こいつ) は私の指導教官の吉田先生です。
田中 : (吉田先生に) 田中と申します。どうぞよろしく。
- (15) (a. これ b. それ) は噂だけど、うちの会社と吉田商事が合併するかもしれないんだって。

指示詞（文脈指示）

＜会話の場合＞

- ・ A : 友だちに田中って男がいるんですけど、そいつ面白いんですよ。(×あいつ)
B : その方、どんな仕事をされてるんですか。(×あの)
- ・ 将来子どもができたら、その子に笑子って名前をつけよう。(×あの)
- ・ A : 去年行ったレストランがあるだろ。あの店にもう一度行かないか。(×その)
B : あの店はおいしかったから、行ってもいいよ。(×その)

- ◆指示詞は会話（dialogue）でも文章（written discourse）でも重要な役割を果たしている。ここでは、会話や文章の中に出てくるものを指す用法である文脈指示（anaphora）を扱う。文脈指示は会話と文章に分けて考えた方がいい。ここではまず会話の場合を考える。
- ◆会話では主にアとソの使い分けが問題になる。使い分けの原則は次の通りである。

話し手が直接知らない場合

- ◆話し手が会ったり見たりして直接知っているわけではないものはソで指す。この場合、アは使えない。例えば、(1) Bは「田中」という人に会ったことがないので「あの方」とは言えない。また、(2)の「子ども」は想像の中のものであり、実際に見たわけではないのでやはり「その子」としか言えない。

- (1) A : 友だちに田中って男がいるんですけど、そいつ面白いんですよ。(×あいつ)
B : その方、どんな仕事をされてるんですか。
- (2) 将来子どもができたら、その子に笑子って名前をつけよう。(×あの子)

話し手が直接知っている場合

- ◆話し手が直接知っている場合はやや複雑である。
まず、同じ人やものを聞き手も知っている場合はアが使われる。例えば、(3)のAもBも「レストラン」を直接知っているので、2人ともアを使わなければならない。

- (3) A : 先月行ったレストランがあるだろ。あの店にもう一度行かないか。(×その)
B : あの店はおいしかったから、行ってもいいよ。(×その)

- 一方、話し手は直接知っているが聞き手は知らない場合は普通、ソが使われる。例えば、(4) Aは「レストラン」を直接知っているがBは知らないので、Aはソを使う。Bはレストランを知らないのでやはりソを使う。

- (4) A : 先月彼とレストランに行ったんだけど、その店に行かないか。(×あの)
B : その店、どこにあるの？ (×あの)

- この場合にアが使われることがあるが、独り言のような、あるいは、聞き手のことを考えていないような言い方になるので避けた方がよい。

- (5) A : 先月彼とレストランに行ったんだけど、あの店はおいしかったなあ。

◆相手のことばの中に出てくるものは原則としてソで指す。例えば、(6) Bは(6) A 1 を聞いた段階でAが言っている「田中」が自分が知っている人のことではないかと思っているが、まだわからないので原則に従ってソを使っている。しかし、(6) B 2 の段階では「田中」が自分が知っている人であることがわかったのでアを使うことができる。ただし、このときに会ったわけではないので、原則通りソを使うこともできる。

- (6) A 1 : 友だちに田中って男がいるんだけど、そいつ面白いんだ。(×あいつ)
 B 1 : その人、ひげを生やした背が高い人じゃない？(×あの人)
 A 2 : そうだけど、知ってるの？
 B 2 : {その人／あの人}、私の友だちのご主人なの。

＜指示詞の形と注意すべき点＞

指示詞には次のような形がある。このうち、以下の点については注意が必要である。

(7)

	コ	ソ	ア
名詞修飾	この	その	あの
代名詞	これ(ら)、こいつ	それ(ら)、そいつ	あれ(ら)、あいつ
属性	こんな、こういう	そんな、そういう	あんな、ああいう
場所	ここ	そこ	あそこ
方向	こちら、こっち	そちら、そっち	あちら、あっち
副詞	こう	そう	ああ

人を指すときに「これ／それ／あれ」は使わない

◆人を指すときに「これ／それ／あれ」を使うと失礼になるので、「この／その／あの＋人・方」「こちら」などを使う。

- (8) a. ×これは山田さんです。
 b. {こちら／この人／この方}は山田さんです。

くだけた話しことばでは「こいつ／そいつ／あいつ」も使える。

- (9) こいつ、山田。よろしく。

これと似た制約に次のものがある。

目上の人を指すのに「彼／彼女」は使わない

◆「彼／彼女」は目上の人を指すのに使わない。代わりに、名前や仕事の立場を表す語(「先生、部長」など)が使われる。

(10) A : 田中先生、来週は（お）休みかな？

B : {×彼／○（田中）先生} は来週出張だから、授業は休みだよ。

「こちら／そちら／あちら」「こっち／そっち／あっち」は人を指す場合にも使える

◆「こちら／そちら／あちら」「こっち／そっち／あっち」は方向を表す表現だが人を指すのにも使える。ただし、「こちら／そちら／あちら」の方が「こっち／そっち／あっち」よりもていねいな言い方である。

(11) トイレはあちらにあります。

(12) こっちが田中で、そっちが山田。どっちもおれの友だち。

「この／その／あの＋N」は名詞を特定するために使い、「こんな／そんな／あんな＋N」は名詞の属性を指すために使う

◆たとえば、(13)は本の題名が書いてある新聞記事を見せて店員に尋ねるときに使い、(14)は雑誌の写真を見せながら店員に尋ねるときに使う。

(13) この本、ありますか。

(14) こんな帽子がほしいんですが。

「こんな／そんな／あんな」は「こういう／そういう／ああいう」よりも悪い意味で使われやすい

◆「こんな／そんな／あんな」も「こういう／そういう／ああいう」も文脈指示で使われるが、「こんな／そんな／あんな」は否定的なニュアンスを持ちやすい。

(15) 母：ハンカチ持った？

娘：持ったわよ。いちいち {○そんなこと／？そういうこと} 言わないでよ。

母：親に向かって「そんなこと」とは何ですか！

<文章の場合>

- ・昨夜中央高速で玉突き事故があった。この事故で2人が死亡した。(？その)
- ・私はビートルズが好きだ。このグループの曲を聴くと心が落ち着く。(×その)
- ・彼は最初日本語が全く話せなかった。その彼が日本語弁論大会で優勝した。(？この)
- ・息子が大学に合格したら、そのお祝いにパソコンを買ってやるつもりだ。(×この)
- ・「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず。」これは慶応大学を作った福沢諭吉のことばである。(×それ)
- ・私がやりたかった仕事、それはパイロットだ。(×これ)
- ・去年は彼女の誕生日に残業が入った。今年もそうだ。(×こう)
- ・この仕事はそれほど簡単ではない。(×これほど)
- ・この3年ほど彼に会っていない。(×その)
- ・私たちはこれから力を合わせて幸せな家庭を作っていきます。(×それから)
- ・これはここだけの話だけど、田中課長、会社を辞めるらしいよ。(×それ)
- ・こんな噂を聞いた。うちの会社とライバル会社が合併するというのだ。(×そんな)

◆次に文章の場合を考える。ここで重要なのは次の点である。

文章ではアは使われない

文章では原則的にアは使われない。なお、一人語り（monologue）も文章とほぼ同様に考えられるが、一人語りではアが使われることもある。

<「この」と「その」①>

◆「この／その」には次のように前に出てきた内容をそのまま受ける用法がある。

(16) 昨日友だちとすしを食べた。{この／その} 寿司はなかなかおいしかった。

◆この用法では普通「この」が使われる。「その」しか使えないのは次の場合だけである。

文と文の関係が対比的、逆接的な場合は「その」しか使えない

例えば、(17)の「最初日本語が全く話せなかった」という内容と「日本語弁論大会で優勝した」という内容は逆接的なので「その」が使える。この場合だけは「この」は使いにくい、それ以外の場合には「この」を使うことは常に可能である。

(17) 彼は最初日本語が全く話せなかった。その彼が日本語弁論大会で優勝した。

(18) 彼の評判は非常に悪い。その彼を彼女は心から愛している。

逆に、前に出てきたものを言い換える場合や、ことばや考えの内容自体を指す場合には「この」しか使えない。

(19) 私はココアが大好きだ。{○この飲物／×その飲物} を飲むと疲れがとれる。

(20) 彼は寝台電車によく乗る。{この乗物／その乗物} には新幹線にはないよさがい

ろいろあるそうだ。

- (21) 「モノの成長はゼロでいい」と主張し出して 10 年近くたつ。21 世紀を目前にして、{○この考え方／？その考え方} に確信を強めている。

(毎日新聞朝刊 1999.6.1)

- (22) まじめで口下手といったタイプの先生の旗色が悪い。教壇から追放されかねないご時世だ。退屈な授業を我慢して聞くのも、それはそれで立派な学習体験だと思うのだが、{○この意見／？その意見} も最近は通らない。

(毎日新聞朝刊 1999.11.12)

また、事実を報告する文章において、そこで述べられていることの中心的なものに関係するものを指すには「この」が使われる。

- (23) ロサンゼルスで 2 年前に見つかった身元不明遺体と、3 年前に行方不明となっていた日本人女性の歯型が一致、遺体が不自然な形で放置されていたことからロス郡警察は事件に巻き込まれた可能性が強いとみて捜査を始めた。{○この女性／？その女性} をめぐっては今年 1 月、日本の週刊誌が不自然な失跡として報道し、女性と交際していたとされる日本人男性が取材直後に自殺した。

(毎日新聞朝刊 1999.4.4)

- (24) 昨夜 J R 中央線の快速電車が脱線した。{○この電車／？その電車} には乗客 500 人が乗っていたが、乗員、乗客にけが人はなかった。

<「この」と「その」②>

◆「この／その」には次のように「これの／それの」の意味の用法がある。

- (25) 先日世論調査が行われたが、{この結果／その結果} は予想外のものだった。

- (26) 自動車の技術的原理は、どこの国の技術者でも知っている。また製造用の材料も、生産設備も金さえ出せば手に入る。だから経済の発展を望む途上国は、どこでも自動車に手を出したがるが、うまくいった試しがない。労働力が豊富で賃金が安くても、また資金力があっても、日本車に対抗するような車ができないのだ。

{この理由／その理由} は簡単だ。一級品ができるかどうか、勝負なのである。アメリカでは毎年各社の車の顧客評価結果が公表されているが、いつも上位を占めているのが日本車である。

(毎日新聞朝刊 1999.10.10)

◆この用法では普通「その」が使われる。①と違って「その」は全ての場合に使える。「この」は使えないのが普通である。特に、指すものが人やものである場合（英語の his, her, its, their に当たる場合）は「その」しか使えない。

- (27) 田中さんは {×この人生／○その人生} の中で、一度だけ海外旅行をしている。

- (28) スタンフォード大学に隣接するルシール・パッカー小児病院から歩いて約 10 分。約 5260 平方メートルの土地に、明るいレンガ色の平屋建て 3 棟の「ドナルド・マクドナルド・ハウス・スタンフォード」が広がる。1979 年の開設。敷地は大学から年間 1 ドルという安価で借りている。

闘病中の子供や {×この兄弟姉妹／○その兄弟姉妹} のために、おもちゃやゲーム機を備えたプレールームもある。
(毎日新聞朝刊 1999.9.3)

<「これ」と「それ」>

◆「これ」と「それ」の違いは基本的に「この」①と「その」①の違いと同じである。

(29) 「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず。」

{○このことば／×そのことば} は慶応大学の創設者福沢諭吉のものである。

{○これ／×それ} は慶応大学の創設者福沢諭吉のことばである。

◆「それ」しか使えないのは次のような場合である。例えば、(30)a は(30)b という表現を2つに分けて表現したもので、(30)b よりも強調的なニュアンスがある。こうした用法では「それ」しか使えない。

(30) a. 私がやりたかった仕事、それはパイロットだ。

b. 私がやりたかった仕事はパイロットだ。

(31) 1956 年、米国ゼネラルモーターズ社は、「夢のキッチン」を発表した。ボタン一つでローストチキンを焼き、TV電話がメニューを教え、全自動皿洗い器が設置されている、全てが銀色の台所。(中略)

四十数年後の現在、自動車社会は我々に「夢の台所」を手渡してくれた。一口大にカットされた野菜や冷凍食品を新鮮なまま、完全な在庫調整をしながら巨大スーパーへ供給する。あとはそれらを買って、自宅で調理するだけだ。

我々が手にした「夢の台所」、それは自動車社会が生んだコンビニキッチンとセットで存在する、「包丁のない台所」だったのである。

(毎日新聞夕刊 1999.9.24)

＝我々が手にした「夢の台所」は～「包丁のない台所」だったのである。

また、文が長くなるのを避けるために、「それ」を使って文を2つに分けることもある。

(32) ガソリンスタンドで、いつも不審に思うことがある。

それは、洗車で待たされる間と洗車中、車のエンジンがかけっ放しにされる、いわゆるアイドリング状態のまま放置されることだ。(毎日新聞朝刊 1999.4.8)

＝ガソリンスタンドで、いつも不審に思うことは、～放置されることだ。

(33) 日本経済はこの10年間ずっと低迷してきた。それは、不良債権の処理が不十分だからである。

＝日本経済がこの10年間ずっと低迷してきたのは、不良債権の処理が不十分だからである。

<「こう」と「そう」>

◆「こう／そう」は話や考えの内容を受ける形である。

(34) 首相は早く辞任すべきだ。私は {こう／そう} 思う。

(35) 終戦直後の神戸。復員した鬼塚喜八郎さん（81）＝写真＝が焼け野原で目にしたのは、輝きを失った少年少女の目だった。生きるためとはいえ子供たちはヤミ商売に明け暮れていた。「次世代を担う子供たちに夢を与えたい」。こう思った鬼塚さんの心を揺さぶったのは、知人が口にした「健全なる精神は健全なる身体に宿る」。

荒廃した若者の精神をスポーツで立ち直らせたいと運動靴作りに踏み出した。
(中略) 素人の怖いもの知らずと事業への情熱が、無名の「鬼塚商会」を総合スポーツメーカー「アシックス(asics)」に育て上げた。(毎日新聞朝刊 1999.11.14)

◆「そう」には述語を繰り返す代わりに使われる用法がある。例えば、(36)の「そう(だ)」は「林さんが好きだ」を繰り返す代わりに使われている。この場合「こう」は使えない。

(36) 田中さんは林さんが好きだ。山田さんも {×こうだ／○そうだ}。

(37) 少子化対策が叫ばれているこのごろ、行政の施策も大切ではあるが、今すぐにでも整備できることを一つ一つ実行していくことが必要なのではないのか。

{×こうすることで／○そうすることで}、子育て環境がよくなり、出生率の向上につながるのでは……とも思う。(毎日新聞朝刊 1999.2.26)

<「今」に関連する表現>

◆コには次のように今に関連するものを指す用法がある。例えば、「このごろ」は最近という意味であり、「これから／これまで」は「今まで／今後」という意味であり、「この／ここ＋期間」は今までの期間を表す表現である。こうした表現はコに限られ、ソにはこうした表現はない。

(38) このごろ、これから、これまで、この／ここ＋期間、

(39) ここ2、3年、毎年冬はスキーに行っている。

ソを使うと前に出てくる時点を基準にして指すことになる。

(40) {○これから／×それから} 友達と映画を見に行くところです。

(41) 一昨日は午前中、弟の勉強を見てやった。{×これから／○それから} 友達と映画を見に行った。

<指すものがあとから出てくる場合>

◆文脈指示では指すものが指示詞より前に出てくるのが普通である。

(42) 子どものころある話を聞いた。{この話／その話} は不思議なものだった。

◆しかし、中には(43)(44)のように、指示詞が先に出てきてあとから指す内容が現れる場合もある。このような場合にはコしか使えない。

(43) こんな話を聞いた。その池の近くを一人で歩いていると、川の中から女の人が出てきて、川の中へ引きずり込もうとするというのだ。(×そんな)

(44) これは噂だけど、田中さんと山田さん、付き合ってるみたいだよ。(×それ)

◆「これ」の場合は「これは～だけど」という形の前置きとして使われるのが普通である。一方、「こんな」の場合は「こんな～（が／を／に）Vした。」という形で使われるのが普通である。指示詞はそれだけでは何を指すかわからない。そういうものが先に来ると、聞き手（読み手）は指示詞の内容を知ろうとして話の内容に注目する。指示詞を先に持つてくるのはこうした効果をねらったものである。

【まとめの問題】

1. 次の文章を読んで（ ）の中の正しい方に○をつけてください。

- (1) ぼくの両親の結婚には a (こんな そんな) エピソードがある。父と結婚する前、母はデパートのネクタイ売場で働いていた。その母に一目ぼれした父は毎日ネクタイを買いに行ったそう。母はあとで父からもらった手紙よりも、父のこの行為によって、b (この その) 性格がわかったという。他の人には「c (こんな こういう) つまらないことを書いて」と思われるかもしれないが、この出会いはぼくにはとても感動的だし、d (この その) 結果ぼくがこの世に生まれることになったのだから、ぼくにとってとても大切なエピソードなのである。
- (2) A : 昨日、この間紹介してくれたレストラン「ごちそう」に行ってきたよ。
B : ああそう。a (あの店／その店)、いいだろ。
A : うん。b (あの店／その店) 庭の眺めも最高だった。また行くことにするよ。
- (3) A : おまえこの間、きれいな女の人と駅前を歩いてたそうだな。a (あの、その人) おまえとどんな関係なんだ？
B : b (あの／その人) はうちの会社の人で、今度結婚しようと思ってるんだ。
A : それはおめでとう。でも、昔おまえは「俺は一生結婚しないんだ」っていつも言っていたらう。c (その／この) おまえが結婚するなんて不思議な気持ちだよ。
- (4) 山田君は泳ぎが得意で国体に出たこともあるんです。(この山田君／その山田君) がおぼれ死ぬなんて信じられません。
- (5) 経済評論家の高原須美子さんは (この著書／その著書) 『女は三度老いを生きる』
の中で、脳血栓で倒れて寝たきりになった実母の看病の様子をつづっている。
(天声人語 1985.1.10)
- (6) 最近海外で目立つ日本人旅行者は、何ととっても若い女性たちだ。仕事でためたお金を旅行で使い切り、帰国してまた (この資金／その資金) を稼ぐといった生活を繰り返している「海外中毒」の女性たちに、筆者も何度となく出会ったことがある。
(天声人語 1993.2.5)
- (7) 今の彼に一番必要なもの、(これは／それは) 温かい家庭だと思う。
- (8) 私は (これまで／それまで) この件に関する発言を控えてきた。(これは／それは) 私が何か言うと、他の人に影響を与えるかもしれないと思ったからである。
- (9) 確かに総合商社は (この 1, 2 年／その 1, 2 年) で大きな転換期に来ている。リスクをとるのが総合商社の「売り」だったが、最近は商社もバランスシートが重視され始めた。
(毎日新聞朝刊 1999.4.25)
- (10) 私は (こう思う／そう思う)。日本はアメリカのイラク攻撃に参加すべきではない。

参考文献

- 安達太郎(1999)『フロンティアシリーズ 11 日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 庵 功雄(1995)「コノとソノ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版
- (1997)「「は」と「が」の選択に関わる一要因」『国語学』188
- (2001)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 井上 優(1997)「もしもし、切符を落とされましたよ」『月刊言語』26-2
- 大谷博美(1995)「ハとガとφ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわばり理論』大修館書店
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- (1998)「非動詞的述語のテンス」『国文学解釈と鑑賞』63-1, 至文堂
- 久野 暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ－「のだ」の意味と用法－』和泉書院
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 野田春美(1995)「「～ハ～ナイ」、「～シハシナイ」、「～ノデハナイ」、「～ワケデハナイ」」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版
- (1997)『フロンティアシリーズ9 「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 野田尚史(1984)「有題文と無題文－新聞の冒頭記事を例として－」『国語学』136
- (1996)『新日本語文法選書1 「は」と「が」』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 三上 章(1953)『現代語法序説』くろしお出版から復刊(1972)
- (1960)『象は鼻が長い』くろしお出版
- 山田敏弘(2000)「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 (2)」『日本語学』19-14

論文編

教育文法に関する覚え書き

－「スコープの「のだ」」を例として－

庵 功雄

要旨

記述的文法研究の発展に比べ、日本語教育のための文法（教育文法）の研究はあまり進んでいない。教育文法にとって重要なことは、それを用いて学習者が文を正しく産出できるように、規則が操作的に記述されていることである。本稿では野田(1997)の言う「スコープの「のだ」」を材料に、記述的文法研究の成果を教育文法に生かすために必要なことについて考える。そして、野田(1997)の記述を一部修正し、「のだ」の用法の一部をより学習者にとって操作的なものに改めた。

キーワード 教育文法、スコープの「のだ」、前提、必須補語、操作性

0. はじめに

文法研究には様々な目的があり得る。例えば、生成文法の一つの重要な目的は言語習得の原理の解明であり、さらには脳の内部にある言語システムの解明もそれに含まれる（cf. 田窪他(1998)）。一方、格文法（結合価文法）はコンピューターにおける構文解析などに利用されている（cf. 池原(1998)）。

こうした中で文法研究の最も重要な応用の分野の一つが非母語話者に対する教育であることは論を待たないであろう。ここに教育文法（pedagogic grammar）という考え方が成立するわけだが（cf. 松岡(1997)、Rutherford & Smith(eds. 1988)）、日本においてこのことを自らの研究の中心的課題に据えて文法研究を続けた代表的人物は寺村秀夫であろう。寺村は、松下(1928)の次の文章を引用した後で、「本書の目的とするのも全くこれと同じで、その意味で本書の目標は実用文法の作成である」（寺村(1982:15)）と述べている。

私は少年の頃、当時最も世に行はれて居った中等教育日本文典とスェンソンの英文典の二書を読んで其の体系の優劣の甚しいのに驚いた。英文典は之を一読すれば和英辞典さへ有れば曲りなりにも英文が作れる。然らば英米人に日本文典と英和辞典とを与へれば日本の文が作れるかといふと、さうはいかない。これ実に日本文典の不備からである。（松下(1928:1)）

しかし、1980年代以降の現代日本語文法の記述的研究の急速な進捗に比べて、寺村の言う「実用文法」の研究はあまり進んでいないというのが現状ではなかろうか。言い方を変えると、文法研究と日本語教育の現場の乖離（断絶）が現在非常に進んでいるということである^{*1}。本稿ではこうした現状を踏まえ、記述的研究と教育文法の間を「のだ」を材料にして考えてみたい。

「のだ」については数多くの研究があるが、その集大成の一つとして野田(1997)が挙げられる。野田は「のだ」をスコープなどの統語的問題に関わる「スコープの「のだ」」と、関連づけなどの談話的問題に関わる「ムードの「のだ」」に分けて考えることの重要性を

*1 これに類した乖離（断絶）は生成文法と日本語記述文法の間にも見られる（cf. 三原(1994 p.i ff.））。

説いている。論者も基本的にこの考えに同意する。その上で、野田の言う「スコープの「のだ」」という概念を日本語教育の立場から検討する。

本稿の目的は「のだ」の理論的・記述的研究内容を検討することではなく、そこで得られた知見をどのようにすれば日本語教育に生かせるかということを考えることにある。従って、「のだ」の理論的・記述的研究に関する先行研究に対する言及は基本的に行わない^{*1}。

1. 二つの「のだ」

次の文を考えてみよう。

(1) 山田：田中さんは新宿でパソコンを買ったのですか。

田中：はい、そうです。

(2) 私は今日、大学を卒業した。明日からは学生ではないのだ。

(1)と(2)では共に「のだ」が使われているが、両者における「のだ」の使用の動機付けは異なるものと考えられる。つまり、前者では「のだ」に前接する「買う」の補語（新宿で、パソコンを）または「買う」の語幹部分が焦点であることを示すために「のだ」が使われているのに対し、後者では「今日、大学を卒業した」ということが「明日からは学生ではない」ということと等価であることを示すために「のだ」が使われている。言い換えれば、前者における「のだ」の使用は統語的に動機づけられているのに対し、後者のそれはテキスト的に動機づけられていると言える^{*2}。

これに類した分類はそれまでにもあったが、こうした分類を前面に出して「のだ」の機能を分析したのは野田(1997)が初めてである。野田は(1)のような「のだ」を「スコープの「のだ」」、(2)のような「のだ」を「ムードの「のだ」」と呼んでいる。

論者はこの野田の2分法は日本語教育においても有益だと考える。「のだ」の用法は複

*1 本稿とは別の立場から「のだ」と日本語教育の関係を論じたものに菊地(2000)がある。菊地は、「のだ」の本質を、「①話手と聞手とが、ある知識・状況を共有し、②それに関連することで話手・聞手のうち一方だけが知っている付加的な情報がある——という場合に、提示するときの言い方」(菊地(2000:25))とする立場から立論をしている。論者はこの説に必ずしも不賛成であるわけではないが、概念の操作性(manipulatability)という点からは「のだ」を単一の意味として捉えることにはやや懐疑的である。なお、菊地のモデルは初級レベルの直接法による教授という環境においては本稿のものより優れていると思われる。本稿のモデルは一応初級レベルの文法項目を習得した学習者が自らの知識を整理する際(あるいはそのようなことを目的とする授業)においてより有効であると論者は考えている。

*2 ただし、前者(野田(1997)の言う「スコープの「のだ」」に相当するもの)がテキストと無関係だとは言いきれない。例えば、(1)を話しはじめの文で言うことはやや難しい。これは、(1)が先行文脈との関連性を帯びていることの証左であると考えられる。これに対し、(7)のような「のだ」を含まない疑問文は話しはじめの文でも使うことができる。この意味で、「スコープの「のだ」」を純統語論的なものとすることはできないが、相対的には統語的に動機づけられた存在と言うことはできよう。

(7) 田中さんはパソコンを持っていますか。

なお、(7)が話しはじめの文で使えるのに対し、(1)'は「のだ」を含まないものの話しはじめの文では使いにくいなど、「のだ」の有無とテキストとの関連性の有無とは完全に対応するものではない。

(1)' 田中さんはパソコンを買いましたか。

雑でなかなか全体像を提示することは難しい。菊地(2000)のように統一的に説明するという考え方もあるが、中級以降の学習者が自ら知識を整理するという状況を考えると、あまり抽象度を上げずに記述しておいた方がいいのではないかと思う^{*1}。

さて、このように、本稿では野田(1997)の記述の枠組みを基本的に踏襲するわけだが、日本語教育への応用という点からその記述に若干の修正を加える。

修正の第一点は「ムードの「のだ」」という用語についてである。本稿ではこれを「関連づけの「のだ」」と「関連づけを表さない「のだ」」に分ける。「関連づけ」は野田(1997)でも使われている語であるが、日本語教育においてはこの概念を前面に出した方がわかりやすいと思われる。ただし、本稿では「関連づけ」に関わる用法(「関連づけ」を表す場合も表さない場合も含めて)については扱わない。これについては別項を用意する予定であるが、概略的な記述は庵(1999)、庵・高梨・中西・山田(2000)にあるので参照されたい。

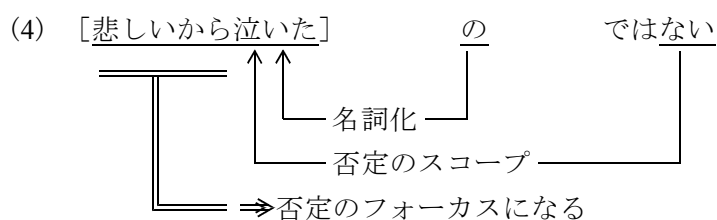
修正の第二点は「スコープ」という概念についてであるが、これについては次節で考えることにする。

2. 本稿における修正

1で述べたように、本稿では基本的に野田(1997)の2分法を踏襲し、そのうち「スコープの「のだ」」に当たる部分について考えるわけだが、この「スコープ」という概念については本稿なりの修正を加えたいと思う。

野田(1997)は、否定や疑問などの作用が及ぶ範囲を「スコープ」と呼び、「前接する部分を名詞化するために必須である「のだ」を「スコープの「のだ」」と呼ぶ」としている。この考え方は久野(1983)、益岡(1991)などの考え方を批判的に継承したものであり、記述的には問題ないものと思われる。例えば、野田は(3)で「のだ」が必要である理由を(4)のように図示して説明している。

(3) あたし、悲しいから泣いたんじゃないのよ。(野田(1997:32))



論者もこの説明は妥当なものと考えているが、日本語教育という観点から見た場合、この説明には問題がある。それはこの説明が解釈的なものである点にある。つまり、この説明だとどのような場合に「のだ」を使うのかということを産出的に説明することが難しいのではないかということである。

例えば、野田(1997:38)は「スコープの「の(だ)」のない文では、原則として、述語によって示される「事態の成立」が、否定や肯定のフォーカスになり、「事態の成立」は否定せずに<文中のある>部分を特に否定のフォーカスにする場合には、「の(だ)」

*1 菊地(2000:26)は論文の目的を「日本語教育(とくに初級の日本語教育)に資することを図ることにある」と述べており、その意味で本稿と菊地(2000)の目的は異なるものと言える。

を用いた…文が適当である」と述べている。ここで、後で使うことを考えて野田(1997)の主張を次のようにまとめておく。

(5)a. 「のだ」がない文では「事態の成立」だけが問題（フォーカス）となる。

b. 「のだ」がある文では「事態の成立」以外が問題（フォーカス）となる。

これは要するに、肯定、否定、疑問というその文の極性（polarity）を問題とする（益岡(1991)の「存在判断型」表現類型に相当する）場合は「の（だ）」が不要（厳密には使ってはならない）のに対し、それ以外の（益岡の「叙述様式判断型」表現類型に相当する）場合は「の（だ）」が必要（基本的には使わなければならないが使わなくてもいい場合もある）となるということである。

さて、この説明が産出的にも妥当であるとすれば、(5)a, b の逆も真でなければならない（そして、(5)a, b の逆も真であれば(5)a, b は教育文法の記述としても十分に有用なものということになる）。なぜなら、教育文法では学習者は日本語に対する文法性判断能力を持たないということを前提としなければならないため、学習者が「のだ」の使用に関して利用できると想定できるのはその文が「事態の成立」だけを問題としているか否かといった意味のないし形式的なことだけであると考えなければならないからである。従って、

(6)a. 「事態の成立」だけを問題とする場合には「のだ」を使わない。

b. 「事態の成立」以外を問題とする場合には「のだ」を使う。

ということが正しいか否かが問題となるのである。

さて、(6)a, b が正しいければ次のような文は全て（もちろん意味は異なるが）文法的になるはずである。なぜなら、例えば(8)で言えば、「彼女が金持ちだから私が彼女と結婚した」こと全体を否定することは意味的には問題ないからである*1。

(7)a. 私は時計を買わなかった。

b. 私は時計を買ったのではない。

(8)a. 彼女が金持ちだから結婚しなかった。(≠(8)b)

b. 彼女が金持ちだから結婚したのではない。

(9)a. ?私はパリで時計を買わなかった。

b. 私はパリで時計を買ったのではない。

しかし、実際は(9)a の文法性は低く、(8)a も(8)b と同様の「彼女が金持ちだから」が否定のスコープに入る読みでは非文である。従って、注5で見たことから「私がパリで時計を買ったこと」や「彼女が金持ちだから（私が）彼女と結婚したこと」の極性を「のだ」を含まない文を使って問題とすることは日本語ではできないのである。このことから、野

*1 (8)b は「彼女が金持ちだから（私が）彼女と結婚した」というのは正しくない（It is not the case that I married her because she was rich.）とパラフレーズでき、「彼女が金持ちだから（私が）彼女と結婚した」という事態の成立を否定する文となる。このことは結局、必須補語以外を含む文においては（スコープの）「のだ」を含む文は「事態の成立」だけを問題とする(6)a タイプの文としても、「事態の成立」を前提としてさらに詳しい内容を問題とする(6)b タイプの文としても機能することを示している。

田(1997)の記述((5)a, b)は解釈的には妥当でも産出的には問題点があると言える^{*1}。

ここで可能性としては、(8)のような理由節は「意味的に」疑問などのスコープに入らない(従って、理由節がある場合は「事態の成立」だけを問題にすることはできない)ということも考えられる。これが汎言語的に妥当ならば、学習者の一般知識に依存してこの問題を説明することも可能となる。例えば、形式上(8)aに対応する英語の文である(8)'の解釈は(8)aに対応する(8)"a(notのスコープの中に理由節は含まれない)に限られ、(8)bに対応する(8)"bの解釈(notのスコープの中に理由節が含まれる)は存在しないとすれば、こうした意味論的な説明も可能であろう。しかし、実際にはTakubo(1985)が指摘しているように、(8)'は(8)"aと(8)"bに対応する解釈を持っている。

(8)' I did not marry her because she was rich.

(8)" a. Because she was rich, I did not marry her.

b. It was not because she was rich that I married her.

= It is not the case that I married her because she was rich.

このことから、「副次補語や理由節が含まれている場合には(日本語の「のだ」や英語の強調構文のような有標の構文を使わない限り)事態の成立だけを問題にすることはできない」といった意味論的な説明は(少なくとも英語母語話者に対しては)使えない。従って、「のだ」を産出する立場の日本語学習者に対する記述としては(5)のような記述ではなく、「のだ」が必要となる場合を具体的に記述していく必要があることになる。なお、このことは野田(1997)の記述を難じることにはならないと思われる。野田(1997)は日本語母語話者を対象とした記述であり、日本語母語話者は日本語文に対する文法的直感を持っているのであるから、(5)a, bのような記述で充分記述的妥当性を持っていると言える。ただし、本稿が対象とする教育文法はそうした日本語文に対する文法的直感を持たない学習者に対するものであり、そこでは解釈的な妥当性だけではなく、産出的妥当性も必要とされるのである。

ここでは「スコープの「のだ」」について修正を加えたが、「スコープ」という概念は必要である。例えば、(3)のスコープが[]内の部分であることは間違いないし、そのことを指摘することは重要である。

(3) あたし、悲しいから泣いたんじゃないのよ。

(3)' [悲しいから泣いた] のではない

ただし、「スコープを広げる」ために「のだ」が使われるといった記述は、日本語母語

*1 (6)aが成り立たないのは必須補語以外を含む文では「事態の成立」だけを問題とする文であっても「のだ」が必要であることによる。逆に言えば、必須補語だけからなる文では(6)aは正しい。このように、文が必須補語だけから成るか否かは「スコープの「のだ」」について考える上で重要である。この点を踏まえたのが後述の(11)である。

話者を対象としない日本語教育では行わない方がよいと本稿では考える^{*1}。

3. 提案

2では野田(1997)の記述に対する修正を行ったが、ここではそれを承けて、本稿なりの記述案を提案したいと思う。

上述のように、本稿では学習者が産出できるための規則ということを目指す。そのためには、記述はできるだけ形式的であることが望ましいと考える^{*2}。その上でまず、ここで扱う「のだ」を「その文に前提が存在することを表す」ものと考え、「前提を表す「のだ」と呼ぶことにする。「前提」は「その文においてわかっていること」と考える。これは基本的に益岡(1991)の「叙述様式判断型」に等しいものである。例えば、

(10) (あなたは) 新宿でこのパソコンを買ったのですか。

という文は「あなたがどこかでこのパソコンを買ったこと」を前提とし、(無標の解釈では)それが新宿であるか否かを尋ねる(即ち、焦点が「新宿で」にある)ものである。

その上で、文が前提を持つ場合として次の3つの場合を考える。

(11)a. 文に必須補語以外の成分が含まれている場合

b. 文中の成分が音声的に強調されている場合

c. 疑問文中に疑問語が含まれている(疑問語疑問文の)場合

(11)a の場合に文が前提を持つというのは、「文が必須補語からのみなる場合にはその文は前提を持たなくてもよい」ということの補集合として規定できることである。述語が取る成分の中で必須であるものが必須補語(=項)であるから、そののみを含む文は前提を持たない(野田(1997)の言い方で言えば「事態の成立だけを問題とする」)ことが可能である(そうでなければ前提を持たない文は存在し得ないことになってしまう)。もちろん、意味的(論理的)には文が必須成分以外を含んでいても前提を持たなくてもよい、ということはある得るが、(8)(9)で見たように、日本語では「のだ」を含まない無標の手段を用いて、必須成分以外を含む文が前提を持たないということを表すことは不可能である。(8)'(9)'で見たように英語ではこれが可能な場合がある)。従って、文が前提を持たない可能性があるのは文が必須補語からのみなる場合に限られ、それ以外の場合である

*1 「スコープを広げる」という表現は(9)aの代わりに(9)bが使われるといった場合にはよいが、(イ)と(ウ)の関係などを述べるのにはふさわしくない(cf. 益岡(1991)、野田(1997))。

(イ) 私はその本を買わなかった。

(ウ) 私はその本を買ったのではない。

この場合に重要なのは、(イ)が「事態の成立」だけを問題としているのに対し、(ウ)は「事態の成立」(例えば「私がその本を手に入れたこと」)を前提にそれ以外のことを述べている、という点にある。つまり、この場合「のだ」はその文に前提が存在することを表示しているのである。

*2 この立場から「は」と「が」の使い分けの規則を考えたものに庵・高梨・中西・山田(2000)がある。

(11)a の場合は文に前提が存在することになる^{*1}。これによって、(12) (13)に見られる文法性の違いが説明できる^{*2}。

(12)a. 私は新宿でこのパソコンを {?買わなかった / ok 買ったのではない}。

b. (あなたは) 新宿でこのパソコンを {?買いましたか / ok 買ったのですか}。

(13)a. 私は学校に行きたくなかったから {??休まなかった / ok 休んだのではない}。

b. (君は) 学校に行きたくなかったから {??休みましたか / ok 休んだのですか}。

なお、久野(1983)以来、次の(14)のような場合に「のだ」が不要であるのはなぜかというところが議論されている (cf. 益岡(1991:67ff.)、野田(1997:42ff.))。

(14) 今日は車で来なかったの、歩いて帰らなければならない。

しかし、これは本稿の立場からはあまり重要な論点ではない。つまり、この場合「のだ」はあくまで「免除され得る」のであって、つけてはならないということではない。従って、産出の観点から言えば「のだ」をつけることで間違いになるわけではない。さらに、解釈の観点から言ってもこの場合に文に前提が存在しなくなるわけでもない (必須補語以外を含む文に前提が存在しない場合が存在するというわけではない)。従って、この場合学習者は「のだ」が使われない場合もあり得るということを知っていれば充分である。

さらに、(11)a は次のような文に対しても有効である。

(15) (エディターを) 終了してもいいのですか。

(16) 田中さんは学生なんですか。

(15) (16)は必須補語だけからなる文であるが、こうした文で「のだ」を使うと「本当に～なのか」といった疑いのニュアンスが生じやすい (この意味で(15) (16)を意図せずに使った場合の「誤用」は(12)b(13)b のような場合の「誤用」よりも重大である)。(15)はあるエディター・ソフトの終了画面に現れる文だが、使用者にとってあまり心地よいメッセージとは言えない。(16)も(17)のような文脈でなら文法的だが、学習者がこうした文脈を知らずに使うと意図せずに礼を失する可能性がある。

(17) 吉田：昨日、田中君の誕生日だったんだよ。

山田：そうですか。で、いくつになったんですか。

吉田：20才だよ。

山田：本当ですか。田中さんは学生なんですか。

このように、(15) (16)が失礼な表現になりやすいのは、本来不要である場合に「のだ」

*1 (8) (9)で見たように、必須補語以外の成分を含む場合、「事態の成立」だけを問題とする文でも「のだ」は使われる。言い換えれば、この場合、益岡(1991)の言う、存在様式判断型 (前提が存在しない) と叙述様式判断型 (前提が存在する) という対立が形式上中和してしまうのである。従って、必須補語以外の成分を含む場合の「のだ」は全て前提の存在を表すというのは厳密には正しくない。しかし、(8)b は基本的には叙述様式判断型の (つまり、「私が彼女と結婚した」ことを前提とし、その理由のみを否定する) 文として解釈されるのでこの記述で大きな問題は生じないと考えておく。

*2 なお、「のだ」は文に前提が存在することを表すだけなので、文中のどの部分が焦点になるかは厳密には音声的実現のされ方や先行文脈などを考慮しなければ決められない。これに関しては野田(1997:51ff.)が詳しい。

を使っているために、その「のだ」が先行文脈との関連づけを表すものとなり*1、(15)で言えば、「あなたはエディターを終了させようとしているが、それは正しい判断なのか」といったことを尋ねる文となってしまうためである。

一方、(11)bは文が必須補語からのみなる場合に関する規定である。

上述のように、文が必須補語からのみなる場合にはその文は前提を持たないことが可能だが、こうした場合でもその文が前提を持つことは可能である。文が必須補語からのみなるにも関わらずその文が前提を持つ場合には文のどれかの要素（述語の語幹部分を含む）が音声的に強調される。強調された要素は焦点となるため、文全体に前提が存在するようになり、「のだ」が使われるようになるのである。このことから(18)と(19)の文法性の違いが説明できる（斜字体は音声的強調を表す）。

(18) (あなたは) パソコンを *買*いましたか。

(19) (あなたは) パソコンを {?買いましたか／ok 買ったんですか}。

最後に、(11)cは疑問文の場合に限られるが、文中に疑問語が存在する場合、その文には（必須補語からのみなるか否かに関わらず）前提が存在する。疑問語疑問文は前提を持つ文の典型であるから、この点に関しては問題ないと思われる。これによって、次のような文法性の違いが説明できる。

(20) だれがガラスを {?割りましたか／ok 割ったんですか}。

(21) どうして留学しようと {?思いましたか／ok 思ったんですか}。

なお、疑問文の場合、次のような制約がある。

(22) 形が疑問文であっても、質問以外の機能を表すときには「のだ」は使われない。これによって、(23)（勧誘）と(24)（質問）との文法性の違いが説明できる。

(23) (田中＝聞き手) 田中さんも私たちと一緒に {行きますか／*行くんですか}。

（勧誘の意味では非文）

(24) (田中＝第三者) 田中さんも私たちと一緒に {?行きますか／ok 行くんですか}。

4. まとめ

本稿では教育文法に対する私見を述べた。論者が考える教育文法とは、それを用いて学習者が正しい文を産出できるように記述された文法のことである。これは基本的には一般の記述的文法と同じものであるはずだが、実際には必ずしも両者是对応していない。その結果、「日本語文法の研究が進んでいく一方で、その研究成果が日本語を教えるときの問題解決に十分還元されていない現状」（庵・高梨・中西・山田(2000:あとがき)）が存在しているのは間違いのないところであろう。本稿ではこの現状の打開を目指す第一歩として野田(1997)の「スコープの「のだ」」という概念を教育文法の立場から検討した。そして、野田(1997)の規定（＝(5)）を一部修正して(11)を立てた。両者の違いは産出のための操作性ということにある。

なお、本稿では関連づけに関わる「のだ」は扱えなかった。この場合も「のだ」がなく

*1 関連づけを表す「のだ」については野田(1997)、庵・高梨・中西・山田(2000)を参照されたい。

ても関連づけが表せる場合を含む包括的な研究が必要だが、それは今後の課題としたい。

【参考文献】

- 庵 功雄(1999)『一橋大学留学生センター教育研究シリーズ2 ことばのしくみを考える』一橋大学留学生センター
- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 池原 悟(1998)「3 機械翻訳」『岩波講座言語の科学9 言語情報処理』岩波書店
- 菊地康人(2000)「のだ(んです)の本質」『東京大学留学生センター紀要』10 東京大学留学生センター
- 久野 暉(1983)『新日本文法研究』大修館書店
- 田窪行則・稲田利明・中島平三・外池滋生・福井直樹(1998)『岩波講座言語の科学6 生成文法』岩波書店
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 野田春美(1997)『フロンティアシリーズ9 「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 三原健一(1994)『日本語の統語構造』松柏社
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 松岡 弘(1997)「展望 文法教育」『日本語教育』94
- 松下大三郎(1928)『改選標準日本文法』紀元社
- Takubo, Yukinori(1985)"On the scope of negation and question in Japanese" *Papers in Japanese Linguistics* 10.
- Rutherford, W. & Smith, M.S.(eds.) (1988) *Grammar and second language teaching*. Newbury House Publishers

*本稿は平成11～12年度文部省科学研究助成金奨励研究(A)「談話・テキストレベルの文法知識の習得を目的とした文法教材の開発」(課題番号11780158)の成果の一部である。

*本稿は『一橋大学留学生センター紀要』第3号(2000年8月 pp.33-42)に掲載された。